
デジモンクロスウォーズ 絆の将と魔道の戦士

超人カットマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンクロスウォーズ 絆の将と魔道の戦士

【Nコード】

N5138W

【作者名】

超人カットマン

【あらすじ】

バグラ軍の皇帝「バグラモン」を倒した工藤タイキは、仲間達とデジタルワールドの復興に取り組んでいた。そんな中、不思議な声に導かれ、タイキは仲間のデジモン達と共に、魔法文化が栄える異世界「ミッドチルダ」にやってくる。彼らはそこで「機動六課」の魔道士達と出会う。

これは、タイキとデジモン達、そして機動六課の魔道士達の、友情と戦いの物語。

プロローグ（前書き）

この作品は、作者の考えたクロスオーバー小説です。本編とは一切関係ないので、本来ならクロスハート軍に加入していないデジモンが仲間になっている事があります。

なお、素人の書いた作品なので、読みにくさ諸々についてはご了承ください。

プロローグ

デジタルワールド、それは不思議な生き物「デジモン」が住む世界。人間のネットワーク技術では確認できないところに存在し、あらゆる事物がデータで構成されている。

長いあいだ平和だったこの世界に、ある日大いなる危機が訪れた。皇帝バグラモン率いる「バグラ軍」が突如デジタルワールドに現れ、デジタルワールドをも破壊せんとする勢いでデジタルワールドを平定した。これにより、デジタルワールドは恐怖と絶望が支配すると思われた。

しかしある日、転機が訪れた。人間界から六人の子供がやってきて、その内の五人の子供がデジタルワールドの各地を侵攻するバグラ軍を蹴散らし。その後二人戦線から離れるも、三人の子供が七人の悪のデスジェネラル、悪に染まったもう一人の子供とバグラモンを討ち破り、彼らはデジタルワールドを救った。

これが、後に「伝説のジェネラル」として後世にまで語り継がれる「工藤タイキ」「蒼沼キリハ」「天野ネネ」の武勇伝である。

「貴方の……力が……必要……です……」

「……!?!?」

「どうしたタイキ?」

何か驚くべき事実を知ったような顔をしている「工藤タイキ」を見て、「蒼沼キリハ」が声をかけた。彼らは今、バグラ軍によって荒

らされたデジタルワールドの復興を手伝っている。

「あ、いや、なんでもない。」

タイキはこう答えて、クロスハート軍のデジモン達が作業を行っている場所へ向かっていった。

「あまり無理はするなよ。」

キリハはとりあえずタイキにこう言うと、自分のブルーフレア軍が作業している現場を見た。

彼の軍団のデジモンは真面目に作業を……………していないやつもいた。

「ボムモン」や「ガオスモン」「ゴレモン」「サイバードラモン」は黙々と働いていたが、「グレイモン」「メールバードラモン」は空を見上げていた。

「どうしたグレイモン？メールバードラモン？」

とりあえずキリハは、彼らに働いていない理由をきいた。万が一バグラ軍の残党か何かが攻めてくる事が分かったというのであれば、無関係なデジモンと非戦闘員を安全な場所まで逃がす必要があるからだ。

「違う。」

「俺たちに助けを求めているやつがいるようだ。」

彼らはキリハにこう答えた。

「何故その事が分かるんだ？」

キリハがたずねると、

「声が聞こえた。」

グレイモンが答えた。しかし、キリハ本人はそんな声を聞いていない。

「お前達、まさかタイキと同じ事は言わないだろうな？」

「ほっとけない、って？」

タイキのチームメイト「天野ネネ」がキリハに声をかけた。傍には

「スパロウモン」「モニタモン」が侍っている。

「ところで、タイキ君がどこにいるか知らない？」

と、ネネはキリハにたずねた。

「タイキならあの辺りで作業してるはずだが、何かあったのか。」

「私は聞いてないんだけど、この子達が自分達に助けを求める声を聞いたって言うから。だからタイキ君と相談しよう。」

キリハの問いに、ネネはこう答えた。

キリハも、自分のグレイモン達も同じような声を聞いたと言っていたことをネネに伝え、タイキと合流する事にした。

「世界を…救って……」

タイキの頭に、消え入りそうなかすかな声が響いた。

「おいタイキ！どうしたんだよ！！」

間の抜けたような顔をしていたタイキに、「シャウトモン」が声をかけた。

「声が、聞こえたんだ。」

タイキはシャウトモンに説明した。

「お前やナイトモン、スパードモンと出会った時と同じように今にも消え入りそうなのやつが助けを求めてきたんだ。でも今回はメロデイじゃなくて声が響いたんだ。」

「どういう事だ？ここはモニタモン達が隅々まで搜索してんだ、助けを求めるやつがいるならその時点で分かっているはずだし。そもそもメロデイじゃなくて声なんて……」

シャウトモンも考え込み始めた。そこへ、先ほど合流したキリハとネネの二人と、件のデジモン達がやってきた。

キリハから、自分のグレイモン達とネネのスパロウモン達がタイキと同じように助けを求める声を聞いた、と報告を受けたタイキは、「俺だけならともかく、他にもあの声を聞いたやつがいるとなると、ただ事じゃないのかもしれない。」

と、考えた。

「って事は、やっぱりあれか！？」

隣にいたシャウトモンは、タイキが何を言いたいのか理解したように、勢い込んでいる。

「ああ、ほっとけない。」

工藤タイキの代名詞とも言える一言がタイキの口から飛び出した。

「受けてくださるんですね。」

その時、ネネを除くクロスハートメンバー、グレイモンとメールバードラモンの頭の中に声が響いた。今度は消え入るような微かな声ではなく、はつきりした声だった。

「ああ、誰が相手でも助けを求めるならほっとけない。」

タイキは頭の中で声の主に語りかけた。

「ではこちらのゲートを通ってきてください。但し、私の声を聞いていない方はこちらに来ることはできません。」

この一言が響いた後、誰の頭にも声は響かなかった。代わりに、白い光を発する光球が現れた。

「キリハ、ネネ。どうやら今回行けるのは俺達とスパロウモンとモニタモン達、グレイモンとメールバードラモンだけみたいなんだ。

二人には悪いけど……」

タイキは、申し訳なさそうに二人に言った。自分一人、二人の主戦力デジモンを連れて違う場所に行くのだ。二人にとってはあまりいい事ではないだろうと思ったのだ。しかし、

「まあ、まだ倒すべき敵がいるのなら話は別だが、今ここでやるべきなのは一日も早い復興だ。俺達でも十分にできる。」

「でも、あなた達の言う声の助けに応じられるのはあなた達だけ。

だから助けてきてあげて。」

二人はこう言って、自分達のデジモンを託してきた。

タイキは二人の心遣いに感謝して、デジモン達を自分の赤い「クロスローダー」に入れると。

「それじゃあ、行ってくる。」

と二人に言って、白い光球の中に飛び込んでいった。

プロローグ（後書き）

次回予告

謎の声に導かれ異世界にやってきた工藤タイキ。

彼はそこで一人の魔道士と出会い、こんな話を持ちかけられる。

「よかったらうちで働かない。」

次回、デジモンクロスウォーズ 絆の将と魔道の戦士

第一話「タイキ異世界に着く」

第一話 タイキ異世界に着く（前書き）

工藤タイキ「俺は工藤タイキ、バグラ軍との戦いで荒廃したデジタルワールドの復興をしていた俺は、ある日突然謎の声に導かれ、仲間と共に異世界へとやってきたんだ。」

第一話 タイキ異世界に着く

光の中に飛び込んだタイキは、次の瞬間街のような場所に現れた。

しかし街といってもそれは過去の話であり、かなり長い間人の営みが無かったのか、今タイキが立っている道路や周りに建っている建物は、あちこちが欠けたりしてとても人が生活できるような有様では無かった。

「なんだここ？もしかしてサイバーランドに戻ってきちゃったのか？」

クロスローダーより出てきたシャウトモンは、開口一発こう叫んだ。
「いや、それは無いと思う。元々サイバーランドには誰も居なかったとはいえ、スプラッシュモンが倒された後、少しずつだけ他の国のデジモン達が集まってきていた。そんな中でここまで荒廃する事は有り得ない。」

「それに、サイバーランドにはもっと高い建物が多かったはずだ。」
タイキの説明に、後からクロスローダーから出てきたドルルモンが付け足した。彼にとってサイバーランドは、お守りに苦労したり、敵に捕まったりと、悪い意味で思い出深い場所である。それ故、他より詳しくサイバーランドについて覚えていたのだらう。

「それならタイキ、俺がクロスローダーから出てこの場所について調べてきてもいいが？」

クロスローダーの中から声が響いた。声の主はベルゼブモン。かつてデジタルワールドがゾーンに分かれていた頃は、バアルモンというデジモンとしてバグラ軍に協力するフリーの殺し屋だった。サンドゾーンでの戦いでタイキ達を狙うも、その後元々このゾーンに存在したが、バグラ軍三元士であるリリスモンに滅ぼされた女神の戦士の生き残りである事が判明、リリスモンの放った刺客から捨て身でタイキ達を護ったとき女神に認められ、今の姿であるベルゼブモンとなり、クロスハートに協力するようになったのだ。

「いや、それはやめたほうがいい。」

しかしタイキは、ベルゼブモンの言葉に反対した。

「ここが何処か分からない以上、誰か一人が別行動を取るのは危険だと思うんだ。」

しかし、だからと言ってここで突っ立っていても何も進展しないので、とりあえず人の居る場所を探してそこに行くことにした。

では早速、とタイキが思った瞬間、背後で爆発音が響いた。

これはしめた、と考えたタイキは、すぐさま回れ右をしてその場所へと向かっていった。誰も居ない、何も無いような場所で爆発が起きる事は無い。と思ったからである。

「うう……どうしよう。」

現場では、一人の少女が壁に背を預け、数十体の機械兵器を相手に向かいあっていた。左手には本のような物を持ち、右手に握った長い杖を前に突き出している。

彼女の名は八神はやて。一仕事を終えて戻る時、偶然目の前の機械兵器ガジェットドローンを見つけ、一般人に危険が無いようにこの場所まで誘導し対処しようとしていたのだが、人の居ない所というのが良くなかったようで、多勢に無勢がいまって現在危機的状态にある。

「この場所じゃ、なのはちゃん達もすぐにはこれないし……」

はやてはこの状況下で、自分の目標を応援すると言ってくれた友人の事を考えていた。苦労に苦労を重ね、ようやく目標を達成できると言ったときに、悪くて殉職、良くても大怪我をした私の事がニユースになったら彼女達はどんな反応をするだろう、と。

「ごめんなみんな、後の事はまかせ……」

はやてが覚悟を決めたとき、

「大丈夫か!!」

突然、赤と青のツートンカラーのTシャツと普通の長ズボンを身に付け、頭に青いレンズの入ったゴーグルをつけた少年が現れた。

はやては、突然の乱入者には驚いたが、

「君、ここは危ないよ。」

と、声をかけた。自分の失敗に他人、それも一般人を巻き込んだとあつてはかなりの大問題である。

「確かにこの場合は危険かもしれない。」

少年は目の前の敵を見据えて、真剣な口調で言った。

「でも、誰かが傷つこうとしているのなら、俺はほっとけない!!」
そして彼は、腰につけていた赤いマイクのような形のデヴァイスを掲げた、実際はクロスローダーなのだが、そんな物の存在を知らない彼女にはこう見えたのだ。

「リロード!! シャウトモン! バリスタモン! ドルルモン! スターモンズ!」

タイキが声の限り叫ぶと、クロスローダーが光だし中から、頭にV字型の角の生えた小竜、青いボディを持つカブトムシ型のロボット、茶色と白の毛並みを持ち頭と尻尾の先にドリルを持った超大型犬、星のような形の生き物とそれにしたがうおにぎり型の銀色のデジモンが現れた。

ガジェットドローンは、突然の新たな敵の登場に驚いたのか、一斉に砲撃を開始した。デジモン達はそれを上手く回避すると、

「いくぜ!! ラウディロッカー!!」

シャウトモンは何処から取り出したマイク型の棍棒でガジェットを殴り倒し、

「アームバンカー!!」

バリスタモンは自身の太い腕でガジェットを殴り飛ばし、

「ドリルブリーダー!!」

ドルルモンは大きくなった尻尾のドリルに乗っかり、回転しながらガジェットに体当たりし、

「メテオスコール!!」

スターモンの指示を受けたピクモンズが、複数のガジェットに襲い掛かる。これによりあつという間に雑兵は片付き、親玉らしき大きな目のガジェットが一体残った。

「アイツが親玉か! ソウルクラッシャー!!」

シャウトモンは、自分の情熱を声に変化させた雄たけびを飛ばし、

「ヘヴィスピーカー!!」

バリスタモンは、腹部のスピーカーから衝撃波を発射し、

「ドリルバスター!!」

ドルルモンは、額についたドリルを打ち出した。

ガジェットに三つの攻撃が当たり、辺りに砂煙が舞った。その砂煙が晴れたとき、ガジェットは健在であった。元から張られているシールドと、何処からか出てきている触手で防いだようだ。

「!どうするんや!!」

後ろのはやては心配そうだが、タイキはまるで動じる事はない。再びクロスローダーを掲げると、再び声の限り叫んだ。

「シャウトモン、バリスタモン、デジクロス!!」

クロスローダーから発せられた光がシャウトモンとバリスタモンを包み込み、その光が一つになると、頭にシャウトモンの角、腹部にバリスタモンの頭部が付いた機械型デジモンが出てきた。

「シャウトモン×2!!」

シャウトモン×2は元氣良く名乗りを上げた。ガジェットは触手を伸ばして掴みかかろうとするも、シャウトモン×2は素早い動きで回避すると、手刀を振り下ろして触手を切断し、バリスタモン単体で放つときよりも威力が上がったアームバンカーで、ガジェットを取り巻くシールドと一緒に光線発射口を潰し。逃がさないようにとガジェットを捕まえた。

「バディブラスター!!」

バリスタモンの頭部から発射する、二人の息がぴったり合って初めて撃つことのできる破壊光線で、ガジェットを粉々に吹き飛ばした。

「やったぜ！一丁あがり！！」

バリスタモンと分離したシャウトモンは、飛び上がって喜んでいる。すると後ろから、

「なんか良く分からない所も多いけど、助けてくれてありがとうな。」

「はやてが声をかけた。もう必要ないと考えたのか、長い杖は光に包まれた途端何処かへ引込み、服装も茶色を基調とした制服に変わった。」

この一連の流れに、タイキ達が驚いて呆然としていると。

「とりあえず、ここじゃなんだから。うちについて来てくれる？」

とはやてに言われたので、とりあえずついて行ってみる事にした。

その後、タイキ達は完成したばかりの、明日ある部隊の隊舎となる巨大な建物に來たタイキは、明日隊長の部屋になるという部屋で、はやてと話をしていた。

タイキはとりあえず、自分の身の上と、どうやってここへ來たのかという事を簡潔に説明した。はやては、タイキが自分と出身世界が同じという事に驚いていたが、その後謎の声に呼ばれてここに来た、と言った時は、

「ようするに、次元漂流者か。」

と、言った。

「すいません、詳しい説明をしてもらえますか？」

タイキは何のことかちんぷんかんぷんなので、分かりやすく教える事を要求した。

なのではやては、

世界というのは、自分達の出身世界一つではなく、様々な文明の発

達した世界が数多く存在しており。自分がその世界の治安の管理を行う「管理局」という組織に所属していることと、ここがその次元世界の中心である「ミッドチルダ」と呼ばれる世界である事。

時折、事件や事故で違う世界に飛ばされてしまう人がいて。そういった次元世界での迷子になった人を「次元漂流者」と呼んでいる。

といった内容の説明を簡潔に行った。そして、

「とりあえず、タイキ君が元々居た、でじたるわーんど、まで帰る方法はうちらが責任を持って見つける、だから。」

この世界でタイキ達の運命を決める一言を言った。

「それまでの間、うちの部隊、機動六課、で働かない？」

第一話 タイキ異世界に着く（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモン

「モニタモンの。」

二人

「デジモン紹介のコーナー!!」

カットマン

「さて、本編の開始と同時に始まりましたこのコーナー。ここではこの小説に登場するデジモンを一話につき一体紹介していきます。」

モニタモン

「さて、今回紹介するのは、シャウトモンですな。」

カットマン

「シャウトモンは小竜型のデジモン。必殺技は情熱の力で生成した火炎弾を投げつけるロックダマシーと、持っているマイクで殴りつけるラウディーロツカー、殺人級の大声を上げるソウルクラッシュ。」

モニタモン

「非常に攻撃的な性格ですが、一度仲良くなれば種族を超えて友情を育むことができますな。」

カットマン

「そして、ラウディロッカーを使うときに使用するマイクは、マクフィルド社という会社で作った特注品で、シャウトモンは常にこれを持ち歩く修正がある。もし失くした暁には、自分がシャウトモンではない、というショックでショック死するらしい。」

モニタモン

「だから、シャウトモンのマイクを取り上げる事だけは絶対にしてはいけないんですな。」

二人

「次回もお楽しみに!!」

次回予告

ついに始動する機動六課。民間協力者として活動に参加する事になったタイキは、管理局のエースオブエースと、彼女の教え子である新人達と出会う。

そして、シャウトモン×4 VS シグナム、夢の対決が実現？

第二話「機動六課始動、お前の力を見せてみる」

第二話 機動六課始動 お前の力を見せてみる（前書き）

工藤タイキ「俺は工藤タイキ。ある日突然仲間達と共に異世界に飛ばされた俺は、そこで八神はやてと会い、しばらく彼女に協力することになった。」

第二話 機動六課始動 お前の力を見せてみる

工藤タイキと八神はやてが会見した次の日、機動六課隊舎の部隊長室には二人の女性がいた。一人は八神はやて本人であり、もう一人は人形のようなサイズの銀髪の女性である。

「ようやくこの部屋も部隊長室らしくなったな。ラインにもぴったりの机が見つかってよかったね。」

はやては、初めての机を堪能する銀髪の女性に言った。彼女の本名は「ラインフォース？」八神はやてを補佐する存在である。

「ラインにぴったりサイズですう。」

玩具なのか、それとも何かのパーツの余りなのかは分からないが、ライン本人はこれで満足しているようだ。

すると、部隊長室の扉が開いて、女性が二人入ってきた。一人は、割と長い栗色の髪をサイドポニーで纏めた活発そうな女性。もう一人は、腰まで届く長い金髪をストレートに下ろした大人しそうな女性である。

「あ、なのはちゃん、フェイトちゃん。」

「二人ともよく似合ってるです。」

入ってきた二人の女性を、はやてとラインは快く受け入れた。そして二人が自分と同じ、茶色を基調とした制服を着ているのを見て、昔を思い出しながら言った。

「にしても、三人で同じ制服なんて中学校以来だな。なんや懐かしいわ。」

それでも何か思い出したのか、

「でもなのはちゃんの場合、飛んだり跳ねたりできる教導隊の制服でいることのほうが多いだろうけど。」

と付け足した、

「うん、でも公式の場の時はこっちって事で。」

栗色の髪的女性ははやてにこう言うと、隣に立っている金髪の女性

と共にはやてに敬礼すると、

「本日をもつて、高町なのは一等空尉と。」

まず栗色の髪的女性が始め、

「同じく、フェイト・テストロッサ・ハラウン執務官。」

次に金髪的女性が続き、

「両名共に、機動六課へ出向となります。」

最後に二人でしめた。

「はい、よろしく願います。」

はやても、二人の挨拶に笑顔で答えた。

「そういえば、昨日はやてちゃんが会ったっていう民間協力者の子
つて？」

突然、思いついたかのようになのはが言うと、

「あ、そうやった、まずは二人に紹介しとくね。」

思い出したかのようにはやてが言うと、

「入ってきてええよ。」

と、扉の向こうへと声をかけた。すると扉が開いて、頭に青いレン
ズのはまったゴーグルをつけた少年が入ってきた。

「紹介するね、民間協力者の工藤タイキ君。」

「工藤タイキです。」

はやての紹介にあわせて、タイキも名乗った。

「初めまして、私は高町なのは。」

「フェイト・テストロッサ・ハラウンです。」

二人も一緒に名乗った。その後、

「で、私はリンフォース？ですよ。」

今まではやてと一緒にいたリンフォース？が前へ出てきた。彼女
が名乗ると同時に、

「何！！これは妖精か？！！珍しい早速解剖を！！！！」

全身をローブとフードで隠した謎の存在が、大量の金属器を持って
タイキの背後から現れた。謎の存在の正体は「ワイズモン」であり、
特に謎ではないが。

「ひえええーですう!!!」

突然の事態に驚いたのか、リインフォース？は全速力で逃げるエリマキトカゲの如きスピードではやての後ろに隠れた。ちなみに、本気で走るエリマキトカゲは水の上でも走れるのだ。

はやて、なのは、フェイトの三人もこの事態には驚いたが、次の出来事には更に驚いた。

「テメエはなんでもかんでも解剖しようとする!!!」

前に出て来たワイズモン同様にタイキの背後より飛び出したV字型の角を持つ赤いトカゲが、ワイズモンを殴り倒したのだ。殴った瞬間かなりいい音がしたので割とダメージは多いはずだが、ワイズモン本人はピンピンしており、

「すまない、珍しい物が多すぎてつい好奇心が抑えられなくなってしまっていたようだ。」

と言うと、そのままクロスローダーの中に戻っていった。

「あの、ところでこちらは？」

フェイトが今までの出来事に呆然としながら、現れたトカゲについてタイキにたずねた。

「俺はシャウトモン、いずれキングになる男だぜ!!!」

フェイトの問には、タイキではなくシャウトモンが答えた。言わなくてもいい事も言っていたが、

「タイキ君はこういう生き物をたくさん連れいるんや。」

はやてはこれからの事も考え、とりあえずなのはとフェイトの二人に説明しておいた。タイキ本人が言うには、自分の連れてくるデジモン達だけで既に一つの軍団を結成しているとの事である。

「とりあえず、そろそろ行かへん？もうみんな集まった頃やし。」

はやてにこう言われ、部隊長室にいる五人と一体は、とりあえずこれから始める部隊のメンバーが集まるロビーへ向かっていった。

ちなみに、何故タイキが機動六課に協力することになったのかとい

うと、昨日まで遡る。

「うちで働かない？」

はやてにこう言われたタイキは、

「俺個人としてはいいんだけど、みんなはどう思う。」

と仲間のデジモン達に伺いをたてた。

「俺は勿論ジエネラルを信じるぜ！」

と、シャウトモン。

「タイキガイイナライイ。」

と、バリスタモン。

「考えてもみる、お前の判断が間違ったことがあったか？」

と、ドルルモン。

このような調子で他のデジモンも次々と賛成意見を表明し、晴れて工藤タイキは機動六課入りになった。

「それじゃあ、制服用意するから身体のサイズ計らんとね。」

と言って巻尺を用意したはやてに色々されたのも、ある意味いい思い出である。

「……とまあ、長い挨拶は嫌われるので以上で終わります。」

ロビーに集まる隊員達の前に設えられた舞台の上で簡単な挨拶をした部隊長八神はやてを、隊員達は拍手で送った。

工藤タイキは他の隊員と混じってはやての挨拶を聞いていたが、挨拶終了後はやてに話しかけられた、

「タイキ君の実力を正確に測りたいから。地図に書いてある場所まで来てくれへん。」

簡単な内容の指示と一緒に、六課隊舎の地図が渡された。その一箇所に丸が付けられていたので、タイキはその場所へ向かった。

一方のなのは、これからこの部隊のフォワード部隊に入る事になる四人の新人達を先導していた。

「そういえば、お互いの自己紹介は済んだ？」

「はい、お互いの名前と出身と経歴と……」

なのはの問いに、なのはから見て一番右にいたツインテールの髪型の少女が答えた。

「そう、それじゃあ改めて機動六課の隊舎の案内をするから付いてきて。」

なのはは四人にこう言って、隊舎を隅々まで案内し、最後に自分が一番よく居ることになるだろう場所、演習場へ向かっていった。

「んがー！暇だあー！」

シャウトモンが叫んでいる。目の前には透き通るほどに青い海、天気は快晴だが、やる事が無い為シャウトモンにとっては退屈極まりないのだろう。

「落着けシャウトモン！」

「騒いだところでなんにもなんねえぞ。」

そのシャウトモンを、バリスタモンとドルルモンがいさめた。最初のうち、キュートモンと共に銀色のおにぎり型生物「ピクモン」を積み上げて遊んでいたシャウトモンだったが、すぐに飽きてしまったのだ。一方のワイズモンは、なにやらパネルをいじっていた。

「ところでワイズモン、なにやってんだ？」

タイキにたずねられたワイズモンは、

「ふむ、なるほど、これをこうすれば……」

ぶつぶつ呟きながらパネルをいじった、すると、突然目の前に広がる何も無いサッカー場のような場所が、あっという間に廃ビル街に変わった。

「すげえー!!」

「ビルが生えたっキュー!!」

その突然の出来事にシャウトモンとキュートモンは大喜びである、

「ワイズモン、あれは一体。」

「あれはかなり精巧な立体映像だ。データさえ入力すれば、動くものであっても忠実に再現できるんだ。」

次のタイキの問いには、ワイズモンは即答した。

「それに、データを変えれば。」

ワイズモンは再びパネルをいじった、すると再び変化が起きた。これまで廃ビル街だった場所が、一瞬で森に変わったのだ。

「すげえ！また変わった!!」

見ているシャウトモンは大喜びである、しかし、

「ちよつと！なにやってるんですか!!」

突然大きなトランクを持った、眼鏡をかけた少女に怒鳴られた。

「これは沢山電気を使うんですから！訓練する時以外は使わないで下さい!!」

今までパネルの前にいたワイズモンをどけると、パネルを操作して出てきていた森を消した。

タイキ達が、今の剣幕に驚いていると、

「あ、シャーリー!!」

どこかで聞いた声が聞こえてきた。新人達に隊舎の案内を終えたなのはが、新人達を連れてやってきたのだ。

「紹介するね、彼は民間協力者の工藤タイキ君。」

なのはが後ろの新人達にタイキの紹介をすると、

「あ、初めまして、スバル・ナカジマです。」

まず最初に、タイキから見て一番右にいる、ボーイッシュな青髪の少女が自己紹介し、

「ティアナ・ランスターです。」

次に、その隣にいるツインテールの髪型の少女、

「エリオ・モンディアルです。」

次に、その隣の少し背の低い少年、と続いていき。

「キャラ・ル・ルシエです。」

一番左にいた、大人しそうな少女が自己紹介を終えると、

「キユクルー。」

キャラの背後から、白い色の鳥のような生き物が現れた。

「この子はフリード・リヒ、私のドラゴンです。」

フリードについてキャラが紹介すると、

「デジモンではないドラゴンだと！！珍しい！！早速解剖を！！！！」

ワイズモンの悪い癖が発動した、何処に隠していたかは不明だが大量の金属器を携えて現れたのだ。

「キユクー！！！！！！」

フリードは電光石火と言えるほどのスピードで、キャラの背後に隠れた。新人フォワード四人が驚いていると、

「だからテメエは何でもかんでも解剖しようとするな！」

ワイズモンは、タイキの近くにいたシャウトモンをはじめとするデジモン達に取り押さえられた。

「すまない、この世界は珍しい物が多すぎてつい。」

取り押えられたワイズモンは、面目なさそうに言った。

「あの、ところでそちらは？」

と、ティアナがたずねた。両隣が啞然としている中で、新人最年長の面目躍如である。

「俺はシャウトモン。」

「バリスタモン。」

「ドルルモンだ。」

「俺はスターモン、こいつらはピックモンズ。」

「イエーイ」

「キユートモンだっキユ。」

「ワイズモンだ。」

部隊長や分隊長と会った時とは違い、無駄の無い簡潔な自己紹介を

した。

「皆集まったんやね。」

みな の自己紹介が終わった所で、何も無かったところにモニターが展開され、はやての顔が映し出された。

「突然やけどタイキ君。演習場でスタンバイしてくれる。」

はやてが言うには、今からタイキの実力テストをするのだと言う。

「よっしゃあ、ようやく出番か!!」

今までやる事が無く、暇だと叫んでいたシャウトモンが張り切り始めた。

「それじゃあシャーリー、ターゲットはガジェット50体でいくで。」

はやてはモニター越しで、部隊のメカニックであるシャーリーに指示を出した。

「それじゃあタイキ君、課題は今から現れる敵の全滅や、それじゃあいくで。」

はやての合図と同時に、シャーリーはパネルのキーの一つを押した。これで50体のガジェットが登場しテストが始まるはずだったのだが、キーを押した瞬間シャーリーがある事に気がついた。

「しまった、プログラムミスで桁が一つ多くなっています!」

その上、

「ロックが掛かってしまって全部倒すまで止められません!!」

これには、はやては勿論、その場で見ていたなのはと新人達、そして一緒にいた部隊の副隊長も驚いた。500体といえば、たとえ自分達のように高威力の魔法攻撃をバンバン打てる魔道士であっても無傷ではすまない数である。

でも、現場のタイキ達はまったく動じなかった。彼らはこれまで、一騎当千と言っても過言ではない数多くの強豪デジモンと渡り合っ

てきたのだ。雑魚兵500等敵のうちにも入らないのだろう、

「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、デジクロス!!」

「シャウトモン×4!!」

クロスローダーを掲げたタイキの声が響いた瞬間、彼の横にいたデジモン達が光で包まれ、その光が一つになった途端、巨大な剣「スターソード」を携えた竜戦士型デジモン「シャウトモン×4」が現れた。

「うわ!合体しちゃった!!」

「しかも凄く大きくなってる。」

見ている新人達は驚きを隠せないようである、

「スリービクトライズ!!」

シャウトモン×4は、スターソードを構えると赤いV字型の光線を発射した。撃たれた光線は、ガジエットの群れに突っ込み、一気に百体以上のガジエットを吹き飛ばした。

「凄い、今の一発でガジエット百体以上撃破、威力はなのはさんのデイバインバスター一発に相当します。」

シャウトモン×4の戦闘データを記録していたシャーリーはなのはに報告した。なのは本人も予想より遙か上をいく彼らの実力に驚きを隠せないようで、無言で返した。

そんな中でも、シャウトモン×4の剣劇は止まらない。頭に搭載されたバルカン砲で狙撃し、太い足で踏み潰し、スターソードで真っ二つにする。これらを繰り返す事で、ターゲットであるガジエットはどんどん数を減らしていく。そんな様子を見て、精神が高ぶるのを止められなくなっている者が居た。なのはや新人フォワードと共に様子を見ていたシグナムである。生粋のバトルマニアである彼女は、シャウトモン×4が戦っている様子を見て、いてもたってもいられないのである。自分も戦ってみたいと、

「ビクトライズブーメラン!!」

シャウトモン×4が赤いブーメランを投げつける、この一発がガジ

エットたちのとどめの一撃になったようで、ブーメランが戻る頃には、ガジエットは一体も居なくなっていた。

「よし、これで全滅……」

帰ってきたブーメランをキャッチしたシャウトモン×4が剣をおろそうとした時だった。突如何かが迫ってくる感覚を感じ、剣を構えなおした。そしてそのまま振り下ろされた剣をスターソードで受け止めた。

「まだだ、まだ私という敵が残っているぞ!!」

剣を振り下ろしたのは、バリアジャケットを身に付け愛用の剣「レヴァンティン」を携えたシグナムだった。

「いけるか？ シャウトモン×4。」

恐らく簡単には退いてくれない、と判断したタイキはシャウトモン×4にたずねた。

「ああ、まだいけるぜ!!」

シャウトモン×4 VS シグナム、第二ラウンドが開始された。

「なあはやて、大丈夫なのか？」

新人達と共にテストの様子を眺めていた小柄な少女「ヴィータ」は、はやてに訊いた。

「いいんや、なんか面白そうやし。」

はやては即答した。いい加減な部隊長の判断に若干呆れながらも、演習場で行われている戦いに目を向けた。

シャウトモン×4が剣を振る、シグナムはそれをかわすか上手くそらすことで彼の剣を掻い潜り、ここぞという所で渾身の一撃を叩き込む。シャウトモン×4も負けじと防御し、シグナムを遠くへふっ飛ばす。シグナム自身も、自分より体格差のある相手との戦いの経験が無いわけではない。しかし、巨大なだけの獣ならともかく、一流の武人同様の動きをする獣と戦う経験はそんなに無い。なので、

大技で一気にケリを付けようとシャウトモン×4から距離を取り、カートリッジをロードした。シャウトモン×4も大技が来る事を悟り、剣に自身の力を注ぎ込んだ。そして、

「紫電一閃！！！！」

「バーニングスタークラッシュャー！！！！」

二人の渾身の斬撃がぶつかり合った、その反動は凄まじく、遠くで見えていたなのは達のところまで衝撃が飛んできた。

そして衝撃と共に発生した砂煙が晴れ、そこに立っていたのは、シャウトモン×4だった。しかし、無傷とまではいかず、体中に傷を負っている。一方のシグナムは、身につけているバリアジャケットは衝撃でボロボロとなり、方膝を付いて肩で息をしていた。

「フフ、私の負けだな。」

シグナムが負けを認めた事で、シャウトモン×4は見事課題をクリアした。

「本当に凄いです、最後の一撃の威力はオーバーSランクをマークしています。」

シャーリーは、目の前で演じられた勝負と、そこから導き出された結果を見て啞然としていた。

その後、部隊長室にてシャーリーとなのはの作った報告書を見たはやてはこう思った。

「凄い、これならあの予言も覆せるかも。」

第二話 機動六課始動 お前の力を見せてみる（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモン

「モニタモンの。」

二人

「デジモン紹介のコーナー!!」

カットマン

「さて記念すべき第二話。今回紹介するのはバリスタモン。」

モニタモン

「バリスタモンはマシン型デジモン。得意技は太い腕で殴りつけるアームバンカー、硬い角でつくホーンブレイカー、腹部のスピーカーから放つ衝撃波で相手を吹き飛ばすヘビースピーカーですな。」

カットマン

「硬い装甲と凄まじいパワーを持つデジモンだが、基本的には心優しいのでむやみにその力を振るう事は無い。」

モニタモン

「ところで、バリスタモンは実はダークボリューモンというデジモンだったという設定がアニメで登場しましたが、この小説では登場するんですか？」

カットマン

「それはまたのお楽しみという事で。」

二人

「それじゃあまたねー！」

次回予告

機動六課が活動を開始して数日後、新人フオワード四人にデヴァイスが渡される日が出てきた。四人がデヴァイスを受け取った瞬間、突如緊急出動がかかる。

次回「機動六課初出動」

第三話 機動六課初出動

クロスハートのデジモンと500体のガジェット、そしてシグナムがやりあつてから数日が経過した。会場となった演習場では今日も喧騒が響いていた。高町なのはが、新入り達をしごいているのである。

「じゃあ今日のまとめ、私一人対みんなでシュートイベーション。白を基調としたドレスのようなバリアジャケットを装備したなのが、空中から呼びかけた。

「はい！！！！」

地上からは四人の新人、そしてクロスハートのデジモン、シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズの声も響いてきた。なのはは、彼らの能力や特技を考え、新人と同じポジションにつけて一緒に訓練しているのだ。デジモン達は、基本的にすることがないから、とこの訓練に参加している。工藤タイキも、かつてデジタルワールドで戦っている時は、作戦を考える時間こそあったがこのように訓練を行う時間は無かった事を思い出し、訓練には自分も参加している。ちなみに、シャウトモンはスバルと、バリスタモンはエリオと、ドルルモンはティアナと、スターモンズはキャロと、それぞれ同じポジションについている。

「五分私の攻撃をかわしきるか、私に一発決定打を与えれば合格。」

「このボロボロの状態で、なのはさんの攻撃を五分かわしきる自信有る？」

なのはが合格の条件を提示すると、ティアナは即座に他の面子に聞いた。

「無理。」

とスバル、

「同じくです！」

とエリオ、

「さすがにちよつとキツイな。だが頭数はこちらの方が多い、なんとか前半は回避に徹し、すきをみつけて一気に突撃するとするか。」とドルルモンが提案し、皆その策で行く事にした。その横でティアナが思った。

（ほんの少し味方の状態を確認し的確な策を考えるなんて、でも関係ない）

「そついえば、シャウトモン達が合体すれば一発で済んじゃうんじゃないかな？」

スバルが突然気付いたように言った。しかし、

「いや、今回はデジモンの個々の力を上げるのが目的なんだ。だからなるべくデジクロスは使わない。」

と、タイキが言った。この言葉に、スバルは少し残念そうにしていた。

「準備はいい？それじゃあいくよ！」

訓練はなのはの掛け声で開始した。最初の攻撃をかわしたスバルとシャウトモンは一番槍を狙い飛び込んでいった。

「うおおおおおー！！！」

スバルは拳を、シャウトモンはマイクを掲げて殴りかかった。しかしなのはは、右手でバリアーを展開し攻撃を防御、そのまま遠くへ弾き飛ばした。

「二人とも、いい攻撃だったけど、まだまだだよ！！！」

そう言うのと、バリアーを展開していた右手から複数の光弾を発射した。

「やべ、ラウディロッカー！！！」

シャウトモンはマイクを振り回して飛んでくる光弾を弾き飛ばした。弾きながら思った、

（ベルゼブモンやツワーマンの光弾より速い、これでまだ手加減してるって？）

かつてベルゼブモンらと特訓していた時の事を思い出した。そうしているとき、

「しまった!!」

光弾2発を見逃してしまったのだ。相手に気付かれないように弾を放つ、これも高町なのはの技術の一つである。

「え、えええ!!」

スバル本人の驚きは最たるものだろう、前と横に進めない状態で光弾が飛んでくるのだから。

「ああ、もう!!」

ティアナが見かねて援護射撃をしようとしたが、出たのは弾が発射された時の音だけであった。

「ええ!弾切れ!!」

ティアナは大急ぎでカートリッジを入れ替えるも、そんな中でも光弾はスバルへと近づいていく。シャウトモンも駆けつけようとするも間に合わない、しかし、

「ドリルバスター!!」

ドルルモンが額のドリルを二発発射し、飛んでいく光弾を打ち落としたのだ。

「助かったぜドルルモン!!」

シャウトモンが礼を言つと、

「なに、仲間なら当然だろ。」

と、ドルルモンは返した。

一方エリオとキャロ、バリスタモンとスターモンズが何をしていたかというと、キャロはバリスタモンの後ろに控え、エリオはスターモンとピックモンズがデジクロスして作った「スターシューター」に乗っかり、バリスタモンがそれを引っ張っていた。

「大丈夫エリオ君、かなりスピードが出ちゃうと思うけど。」

「大丈夫だよ、スピードだけが取柄だから。」

彼らの作戦はこうである、まずはスバル、ティアナ組がなのはの注意をひき、意識を自分達側へ集中させたところで、エリオが突貫するというものである。

(そろそろだな)

とドルルモンは思ったのか、右後足でこれから突進する闘牛のように地面を蹴った。これがエリオ突貫の合図である。

「今だシスターー!!」

合図を受け取ったスターモンズは、キャロに合図した。合図を受けたキャロは、エリオに速度上昇の力を与えた。

「イクゾー!!」

バリスタモンはこう言って、スターシューターから手を離れた。すると、エリオは弾丸の如き勢いで飛び出した。飛んでいくエリオは真っ直ぐなのはの方へ向かっていき、見事命中した。

「うわああ!!」

結果は弾き返されたようで、エリオがふっ飛んできた。しかし、

「合格だよ。」

なのはのバリアジャケットには、一箇所焦げ目がついていた。そこにエリオの攻撃が少しあたたまったようだ。

これにより彼らは最後の訓練を終了した。一度皆で集合した時、

「おい、なんか焦げ臭くねえか?」

突然ドルルモンが言った、

「きゅくうー」

フリードも同じように思っている、とキャロが説明した。

「あーもしかしたら!」

スバルが思いついたかのように言った、そして屈みこむと自分の履いているローラを確かめた。

「あー、やっぱりだ。相当無理させちゃったかな。」

彼女の抱えるローラーからは煙が立ち上っている。これが焦げ臭さの正体だったようだ。

「それに、ティアナの銃の調子も悪いんじゃないか?」

ドルルモンは、ティアナに言った。

「うーん、まあ、ちよつと現場で使うにはまずかなってくらいだけど。」

ティアナは、自分の銃を詳しく確かめながらブツブツ言っている。

そんな皆を見たのはは、

「みんなもそろそろ実戦用のデヴァイスに切り替えるべきかな。」
と思ったように、

「それじゃあみんな、着替えたらメカニックルームまで来てくれる。
渡したいものがあるから。」

と言つて、訓練場を後にした。

新人四人とタイキとクロスハートのデジモン達が隊舎の前に戻つてくると、隊舎の前に黒いスポーツカーが止まっているのが目に入った。乗っていたのは、

「あ、みんな。」

「訓練終わつたんやね。」

はやてとフェイトだった。二人が言うには、フェイトは外回り、はやては聖王教会へ用があるため、二人で出かけるのだという。

「タイキ君は部隊での調子はどうや。」

ふとははやてがタイキにたずねた。

「みんな絶好調です。」

「いつ事件があつてもいけるぜ！」

タイキ、シャウトモンの順番で答えた。

「それは良かった。でもあまり空回りせえへんようにな。」

はやては集まっていた皆にこう言つと、そのまま車で目的地へ向かつていった。

しばらくして、訓練用の丈夫で動きやすい服装から、六課の制服に着替えたフォワード四人が、タイキ達と一緒にメカニックルームへやって来た。そこには、クリスタル型の端末がついたペンダント、

白いカード型の端末、エリオとキャロが元々持っていた腕時計とブレスレットがあった。四人の新人に渡される新デヴァイスである。

「そうです！設計私、協力、なのは隊長にフェイト隊長、リイン曹長にレイジングハート、そしてワイズモン。」

自称六課のメカニックの「シャリオ・フィニーノ」通称シャーリが元氣よく言っている。その後、

「後これ、調べさせてくれてありがとう。」

と言うと、タイキにクロスローダーを渡した。実は訓練が終わった後、はやて、フェイトの二人とわかれてからすぐに、シャーリーからクロスローダーを見せて欲しいと言われ、こうして今まで貸していたのだ。タイキ自身も、クロスローダーの仕組みについては気になっていたのだ。

「ほんとにこれ作った人すごいよ、中は精密機械と有機体で構成されていて、それが何を意味しているのかすら私たちじゃまるで分からない。」

すると、扉が開いてなのはとリインフォース？が入ってきた。

「どうかなシャーリ？午後からの訓練で使える？」

「はい、遠隔操作でのコントロールも可能ですし、状況に合わせて微調整すれば。」

なのはの質問に、シャーリは即答した。そして、四機のデヴァイスの詳しい説明を始めようとしたとき、突如赤い明かりが点灯し警報が鳴った。

「これって、第一級警戒態勢！？」

新人四人は勿論、なのはやリイン、シャーリも驚いた。

報告によると、山岳地帯を走る貨物運搬用のリニアレールが、多数のガジェットに制圧されたのだという。

なので、なのは、リイン、スバル。ティアナ、エリオ、キャロ、そしてタイキ達はヘリコプターに乗って現場へ向かっていった。

「はやて、本当に大丈夫？」

事件発生の報告を聞いていそいそと帰り支度をするはやてに、黒い修道服姿の金髪の女性「カリム・グラシア」がたずねた。

「大丈夫や、カリムのおかげで今六課は好きなように動かせる。」

はやてはこう答えているが、それでも心配らしく、

「でも、最近は新型のガジェットも出てきているっていうけど……」
と、言っている。

「本当に大丈夫や、みんな強いし。」

それでもはやては笑顔でこう言った。カリムは呆れたのか安心したのかは分らないが、

「シャツハ、はやてを機動六課隊舎まで全速力で届けてあげて。」
通信で部下にはやてを送る準備をするように言った。

一方、外回りの用事で高速道路を車で走っていたフェイトは、連絡を受けた場所から一番近いパーキングエリアに来ていた。車を停め外に飛び出すと、

「これから現場に向かいます。飛行許可を。」

通信で現場まで空を飛んでいく許可を求めた。

「了解、飛行許可を与えます。」

通信で許可を取ると、ポケットから三角形の黄色いアクセサリを取り出し、

「バルディッシュザンバー！セットアップ！！」

と叫んだ。すると、服装がいつもの六課の制服から、動きやすい黒い服の上に白いコートを身につけた服装に変わり、バルディッシュ本体は変形して斧のような形になった。

この姿になったフェイトは空へ飛び出し、それこそ稲妻のようなスピードで現場へ向かっていった。

外へ出ていた隊長二人が行動を開始した頃、ヘリで現場へ向かう新人達はというと、

「今回の任務は、リニアレール内のガジェット全てを逃亡なしで殲滅し、積み立てるロストログア、レリックの回収ですよ。」

「いきなりのハードな任務かもしれないけど、訓練どおりやれば大丈夫だからね。」

同伴しているリン、なのはの二人から任務の内容を聞いていた。新人の中で、スバル、ティアナ、エリオの三人は割りと落ち着いていたが、キャロだけは違った。彼女は任務の内容に不安があったのではない、自分の力に不安があったのだ。

フェイトの保護児童である彼女は、自らの生まれた里に居場所が無かったのてこうしてフェイトに引き取られたのだ。その居場所が無かった理由が、自分の力が危険すぎるから、なのである。

彼女は召喚魔法の中でも特に珍しい竜召喚を行えるうえ、召喚できる竜の中でも特に強力な竜を二体召喚できるのだ。しかし、呼び出すのはともかくとして、肝心のコントロールが上手くいかないため、危険扱いされているのだ。

「どうしたシスター！調子が悪いのか？！」

スターモンズが心配して話かけた、その後、いつだったかに少しだけ聞いたキャロの昔の話を思い出したのか。

「大丈夫だシスター、シスターの魔法でみんなを護るんだ！！」

本人は励ましているつもりなのだろう、ピックモン達と一緒にこう言っている。

「そうだよ、僕やバリスタモンもいる。きっとできるよ。」

「ウム。」

それに続いてエリオ、バリスタモンも励ました。

「うん。」

緊張は抜けないが、それでも決心はついたらしく、キャラは少し力なく返事した。

タイキ、なのは、リインの三人は、そんな新人達の様子を見て安心して、

「東の方角より飛行型ガジェット数十機接近。」

現場の様子を遠くから見ているロングアーチスタッフから連絡が入った。

「それじゃあ、私とフェイト隊長で空をおさえるから、レリックの回収はみんなに任せるよ。」

なのはそう言い残すと、自分のデヴァイス「レイジングハート」と一緒に飛び出そうとしたが、

「あ、待って下さい。」

と、タイキにとめられた。タイキはクロスローダーを取りだすと、

「リロード！スパロウモン！！」

と叫んだ。すると、クロスローダーから光が飛び出し、光の中から両手に銃を持った黄色い飛行機型のデジモンが現れた。

「呼んだ？！タイキ。」

ここに来てようやく出番が回ってきたので、スパロウモンは嬉しそうにしている。

「スパロウモン、この人と一緒に空の敵をおさえていて欲しいんだ。」

タイキはスパロウモンに今回の任務について説明した。

「うん、分かった！！」

スパロウモンはこう言うつと、早々に飛び出し上空の敵の群れに向かっていた。

「じゃあ行ってくるね。」

なのはもスパロウモンに続き、ヘリから飛び出した。

「レイジングハート、セットアップ！！」

なのはの手元にあった赤い球体のアクセサリーが光と同時になのは

がその光に包まれ、光がやむと今日の訓練で装備していたバリアジヤケットの姿になった。

「お待たせ、スパロウモンだっけ？よろしくね。」

「そういうそっちは高町なのはだっけ？こっちもよろしくね。」

空で合流した二人は、互いに挨拶を交わした。

（この人、なんかネネに似ているな）

改めてなのはを見たスパロウモンはこう思った後、先行して敵の中に飛び込んでいった。

「ウイングエッジ！！」

スパロウモンは腕の良いパイロットの乗る戦闘機のような動きで敵を上手く誘導し、両翼に仕込んだ刃物でガジェットを切り裂いた。

「アクセルシューター！シュート！！」

なのはも、自分の周りに発生させたエネルギー弾で複数のガジェットを撃ち抜いた。

「なのは、お待たせ！」

フェイトも合流し、なのは、フェイト、スパロウモンによる空中制圧が始まった。

「よし、新人共！俺のヘリじゃ近づけるのはここまでだ。」

一方の新人達は、現場への降下ポイントに来ていた。現場へ向かうのは、スバル、シャウトモン、ティアナ、バリスタモン、エリオ、バリスタモン、キャロ、スターモンズ、そしてリインフォース？である。タイキは任務が終わるまでヘリの中で後方支援に当たることになった。

「スターズ3、スバル・ナカジマ、シャウトモン。」

「スターズ4、ティアナ・ランスター、ドルルモン。」

「「行きますす！！」」

最初にスターズ部隊の二人がヘリから降り、それに相棒のシャウトモン、ドルルモンが続いた。

「俺達ノ番ダ。」

スターズ部隊の後ろで待機していたエリオ、キャロの二人にバリスタモンが言った。

「いこうぜシスター、俺達やフリードと大活躍しようぜ!!」

スターモンズも元気良く言った。

「一緒に行こう。」

最後にエリオに声をかけられ、二人で手をつなぐと、

「ライトニング3、エリオ・モンディアル、バリスタモン。」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエ、スターモンズ。」

「行きます!!」

現場へと降りていく新人四人は、同時に叫んだ。

「マツハキヤリバー!!」

「クロスミラージュ!!」

「ストラーダ!!」

「ケリユケリオン!!」

「セツトアップ!!」

そして、スバルは動きやすい短パンと半袖のジャケットに、右手にリボルバーナックルを装備した姿。ティアナは白と黒を基調とした服装に、両手に銃を装備した姿。エリオは赤い装備の上に白いコートを身に付け、槍を装備した姿。キャロはピンク色のドレスのようなゆったりとした服装に、甲に宝石のような物がついた手袋をはめた姿になった。

スターズ部隊は車両の進行方向から見一番後ろの車両に着地し、シャウトモンは持ち前の身軽さで柔らかく着地し、ドルルモンは右側の岩壁をつたって降りてきた。その反対側にはライトニング部隊が着地し、バリスタモンは足のバーニアを使って着地し、スターモンズは持ち前の浮遊能力で降りてきた。

新人達が改めて自分達の身につけるバリアジャケットを見て、自分

達の隊長のバリアジャケットに似ているな、と思っていると、車両の内部からガジェットの大砲が飛んできた。この砲撃が任務開始の合図となり、四人と四体は列車の中に突撃していった。

まずスバルとシャウトモンは、ティアナ達とは別ルートで問題の車両へ行く事になり。スバルは持ち前の格闘技、シャウトモンはマイクを振り回して大暴れしている。またティアナ、ドルルモン組のほうも、得意のヒットアンドアウェイ戦法で確実にガジェットを潰している。

そんな中、彼らに連絡が入った。

「ライトニング部隊、大型ガジェットと交戦。」

ライトニング部隊も、スターズ部隊同様着実にガジェットを潰しながら問題の車両を目指していたが、その問題の車両の扉の前にその大型ガジェットが頑張っていたのだ。

「ヘヴィスピーカー!!!」

バリスタモンは腹部のスピーカーから強烈な音波を発射したが、ガジェットの重さに勝つ事が出来ずまるで効いていない。次にエリオが槍で貫こうと向かっていたが、今まさに槍が突き刺さろうという瞬間、突如エリオの槍の先端の魔力が四散してしまった。ガジェットが持つ特有の対魔法用の波長「アンチマギングフィールド」略して「AMF」の効果である。

ガジェットは持ち前の触手でエリオを掴むと、軽々と外へ投げ飛ばした。

「エリオ君!!!」

「俺達がいくぜ! シスター!」

エリオを救出しようと手を伸ばしたキャラに、スターモンズは互いの手をつないで一本のロープのような物を形成すると、一番端のピクモンがエリオの手を取り、反対側のスターモンがキャラの手を

取った。しかし、エリオの基本の体重と一緒に、ガジェットに投げ落とされた時の勢いが付加され、耐え切れずにエリオ、キャラ、スターモンズは落ちていった。

落ちていきながらキャラは思った、私がみんなを護るんだ、と。

「フリード、一緒に活躍しよう。ちゃんとコントロールしてみせるから。」

キャラの元にフリードがかけつけた時、キャラとフリードは巨大な光に包まれ。光がやんだ瞬間、落ちていつているエリオとスターモンズを白い飛翔物が救出した。

「竜魂召喚、フリード・リヒー！」

正体は、キャラがいつも連れている竜フリードだった。しかし今回の姿はいつもの鳥のような小さい姿では無く、畳三枚分はかくある大きくて立派な翼を持つ逞しい竜の姿となっている。

「これが、フリードのちゃんとした姿。」

「うひょー！ かけえー！」

この姿を初めてみたエリオとスターモンズは勿論驚いている。

「ウガガガガガ！ー！」

すると、頭の上から聞き覚えのある声がした。見ると、バリスタモンが敵ガジェットの触手に捕まって、今にも落とされそうになっている。

「あ、たいへん！」

「バリスタモンが！」

キャラとエリオがこう言った瞬間、触手の拘束から開放されたバリスタモンが落ちてきた。エリオとスターモンズがフリードの背中で受け止めてから、

「さあ、反撃だぜシスター！」

スターモンズの一言で再び現場に戻って行った。そして、再び件の敵と対峙した。

「キャラ、僕とバリスタモンに強化を！」

エリオは、たった今考え付いた作戦を実行する事にして、みなに内

容を耳打ちした。そして、

「フリード、ブラストフレア!!」

フリードが口から大量の炎を吐き出した。普通の相手ならこの一発で灰になるが、ガジェットは特殊な材質の金属で出来ているので並大抵の炎ではびくともしない。だが、大量の炎に遮られ、ガジェットのカメラは前が殆ど見えない。そこに突然、エリオが飛び込んできた。

「いくぞ!!」

エリオは強化された槍を突き刺すと、ガジェットのボディに大きな切り傷を入れた。

「今だ!バリスタモン!!」

「ホーンブレイカー!!」

エリオの考えた作戦は、まずフリードの炎で相手の目くらましを行い、相手の視界が制限された所でバリスタモンに投げてもらい高速で相手のそばに近づき、自分の技で傷を与えた後、バリスタモンでとどめをさす、というもののだ。作戦は見事成功し、バリスタモンの硬い角はガジェットに付いていた切り傷に当たり、ガジェットは真っ二つに割れ爆発した。

「どうやら、これで任務は終わりみたいですネ。」

リニアレールを止めるため運転室に向かっていたリインは、無事にリニアレールを止めスバルたちと合流していた。スバルたちも、自分達が遭遇したガジェットを全て倒し、問題のブツである「レリック」を回収し、入れ物を抱えている。

この時は皆、これで任務完了と思っていた。

この任務の様子を見ていたのは何も、機動六課の援護スタッフだけではない。ミッドチルダのある場所で一人の男がこの様子をモニタで眺めていたのだ。

「しかしドクター、よろしいのですか？いきなりここまでの戦力をつぎ込んでしまつて？」

その後ろでは、一人の女性がパネルを操作しており。作業の途中、女はドクターと呼んだ男に訊いた。

「彼らは仮にも一度世界を救つたんだ。これくらいどうという事もないはずだ。」

ドクターと呼ばれた男は、気味の悪い笑みを浮かべて答えた。

「あつちの方も済んだみたいだし、ここもそろそろ終わらせようか？」

新人達の邪魔をさせないため、空の敵を相手にしていたのは、フエイト、スパロウモンはそろそろとどめにいこうと考えた。

「アクセルシューター！」

「ハーケンスラッシュ！」

「ランダムレーザー！」

三人はそれぞれの得意技を放ち、残るガジェットを全て打ち落とすた。

「二人はどれくらい倒した？」

早速スパロウモンはなのは、フエイトにたずねた。

「四十機かな。」

「私も。」

「僕と同じだ。」

それぞれ四十機という結果だった。

早速新人達のもとへ向かおうとした三人、そして新人たちのもとに驚くべき連絡が届いた。

「巨大なエネルギーを持つ飛行編隊が近づいてきます！」
言われた方向を見ると、鳥やドラゴンのような姿の巨大な生き物が
ここへ向かって飛んできた。

第三話 機動六課初出動（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！」

カットマン

「今回のテーマはドルルモン。ドルルモンは獣型デジモン。必殺技は額のドリルを飛ばすドリルバスター、とてつもないドリルの回転で発生させた竜巻で吹き飛ばすドルルトルネード、ドリルに乗って回転しながら体当たりするドリルブレード。」

モニタモンA

「額のドリルは自分の毛で出来ているので、取れてもまた生えてきますな。」

モニタモンB

「ドリルの回転はミキサーやドライバーにも使えますな。」

モニタモンC

「今度うちのイス直してよ。」

カットマン

「日曜大工かよ！」

全員

「それじゃあまたね！」

次回予告

突如襲来した飛行デジモンの大艦隊。やつらと渡り合う為、ついにやつらが参戦する。

次回「逆転のシャウトモン×3GM」

第四話 逆転のシャウトモン×3GM

リニアレールがガジェットに制圧されたと連絡があり、現場へ出動し見事ガジェットの全機殲滅とレリックの回収を終えた機動六課の面々に、突如驚くべき報せが入った。

「現場へ向けて強大なエネルギー反応が向かっています。」

見ると、小さな翼が生えた竜、オウムのような姿だが両手が付いた鳥、赤い体で両手が武器になっているドラゴンが群れをなして飛んできた。極めつけは彼らの群れの中央にいる、とてつもなく巨大な竜である。

「あれは！エアドラモンにパロットモン、メガドラモンじゃ！中央の巨大なドラゴンはギガシードラモンじゃ！」

ヘリの中で様子を見ていたタイキのそばで声が響いた。いつのまにかリロードしていた「ジジモン」の声だった。

「でもどうして？他の三体はともかくギガシードラモンが活動可能範囲は地上と水中だけだったはずです。」

すると、タイキのクロスローダーの中から女性の声が響いた。しかし、今はその声の疑問に応じている暇は無い。突如、ギガシードラモンの腹部が開くと、中から丸い大型ガジェットが次々と出てきた。そして下で停車しているリニアレールめがけて降下していった。

空にいたなのは、フェイト、スパロウモンの三人は、突然の援軍を食い止めようとしたが、エアドラモン、パロットモン、メガドラモンの砲撃で牽制され身動きが取れなくなった。

「なあ、もっとヘリをリニアレールに近づけられないか？」

タイキは、ヘリの操縦桿を握るヴァイスにたずねた。

「無理っすよ、これでも危険地帯ギリギリを飛んでるんすから。」

しかし、肝心のヴァイスはこう答えた。

（仕方ない）

タイキはこう思うと、なのはや新人四人がやったように飛び降りた。

そして、空中でクロスローダーを掲げると、

「リロード！メデューサモン！」

と、叫んだ。するとクロスローダーから光が迸り、全体を白で統一した装備を身に付け、背中から巨大な白い翼を生やした女性の姿をしたデジモンが飛び出した。

彼女はタイキを空中で捕まえると、そのまま着衣を乱さず華麗にリニアレールの上に着地した。

「ありがとう、メデューサモン。」

「いえいえー、またいつでも使って下さいね。」

タイキは彼女、メデューサモンに礼を述べ、メデューサモンはそれに答えた。そしてその声は、先ほどクロスローダーの中から響いたものだった。

その直後、タイキ達とフォワードメンバーの周りに、先ほどギガシードラモンから放出された大型のガジェットが多数降りてきた。

「おいおい、さすがにまずくねえか？」

シャウトモンにしては珍しく弱音のような事を言っている。それもそうだ、リニアレールの上は狭いので×3以降のデジクロスを使えないのだから。

「大丈夫ですよ。私一人でもこのガラクタ全部フルボッコに出来ますから。」

メデューサモンは皆にこう言い放った。清楚な見た目と凛々しい声からは想像できない物騒な言い方に、この場にいる皆は一樣にこう思った。

（見た目は可愛いのに、すごくもったいない）

しかし、今は呑気な事を考えていられる場合ではないので、

「リロード！ベルゼブモン！ディアナモン！」

タイキは新しく二体のデジモンをリロードした。ベルゼブモンと一緒に出てきたのは、全身を輝く銀の忍装束で包んだ、女性の姿の神人型デジモンである。この「ディアナモン」そしてメデューサモンのクロスハート加入の経緯については、後日改めて明らかになりま

す。

「二人で上空の敵を牽制して、できれば三人を助けてここまで護衛してくれないか。」

「分かった!」

「はい!」

タイキから仕事の説明を受けた二人は、早速上空の敵へと向かっていった。そして、ベルゼブモンは銃をぶっ放しながら、ディアナモンは取り出した諸刃の大鎌を弓のように使い、敵の部隊を混乱させている所を見届けると、改めて周りを見た。

「ともかく、この状況をなんとかしよう。」

タイキのこの言葉で、皆はとりあえず背中合わせになって敵に対応する事にした。

「シャウトモン、バリスタモン、メデューサモン、ナイトモン、ポーンチエスモンズ、デジクロス!」

タイキはクロスローダーを掲げて力の限り叫んだ。

「シャウトモン×2!!」

「メデューサモンNP」
ナイザリンセス

シャウトモンはバリスタモンと合体した姿になり、メデューサモンはナイトモン、ポーンチエスモンズとのデジクロスで純白の鎧とドレスを身につけた姿になった。

「いくぞみんな!!」

「応!!」

タイキの掛け声と共に皆はガジェットに向かっていった。

「アームバンカー!!」

「リボルバーナックル!!」

シャウトモン×2とスバルは渾身のパンチを繰り出すも、ガジェットの硬いボディの前には余り効いていないようだ。

「グングニル!!」

メデューサモンNPも、槍に変化させた剣で一体ずつ確実にガジェットを潰していくが、数が多いので埒が明かない。

空の方も、なんとかベルゼブモン達のは達と合流するも、敵の囲み撃ちに合い、ディアナモンが作り上げた幻影のおかげで護られているという芳しくない状況になっている。

（なんとかこいつらを手短になんとかしないと。）

タイキが周りのガジェットたちをみながらこう思うと、

「俺がいくぞタイキ。」

「そろそろ俺達の出番をよこせ。」

クロスローダーの中から声が響いた。タイキは思い出した、デジタルワールドからミッドチルダに来るさいに、奴らがついて来ていた事を、

「よし！行くぞ！」

タイキはクロスローダーを掲げると、思い切り叫んだ。

「リロード！グレイモン！メールバードラモン！」

クロスローダーから光が発せられ、中からティラノサウルス型の黒いデジモンと、青い猛禽型の戦闘機のようなデジモンが現れた。

「いくぞ！グレイモン！！」

メールバードラモンはガジェットを一体足で掴むと、グレイモンめがけて飛んでいった。

「ホーンストライク！！」

グレイモンは角を突き出してガジェットに突進し、ガジェットを一体角に突き刺しメールバードラモンに向かっていき、メールバードラモンが掴まえたガジェットとぶつけ合った。

「ああ、そうだ。」

グレイモンとメールバードラモンの戦い方を見ながら、メデューサモンNPもいい作戦を思いついたようだ。

「ドルルモン！スターモンズ！あれやるよ！！」

と呼びかけた。

「バインド・オブ・ゴルゴン！！」

メデューサモンの眼が怪しく光ると共に、複数のガジェットの動きが鈍り始めた。彼女の眼から発せられた光を受けた事で表面の材質

は勿論、触手の間接から内部の構造に至るまで、彼方此方が石のようになってるのだ。

「ドリルブリーダー!!」

「メテオスコール!!」

ドルルモンは、巨大化した尻尾のドリルで敵に突撃し、スターモンズはその反対側から大量のピックモンを投げつけた。

二つの技がぶつかり合った瞬間、石化ガジェットの表面がみるみるうちに剥がれていき、しだいに内部構造があらわになり始めた。

これが、メデューサモン考案の「対石化ガジェット用りんごの皮むき戦法」である。

「ティアナ、とどめをお願い。」

半分以上の外殻が無くなったところで、メデューサモンNPはティアナに言った。

「クロスファイヤーシュート!!」

ティアナは待つてましたと言わんばかりに両手の銃から数発の光弾を放ち、ガジェットの中枢を完璧に打ち抜いた。その間にもグレイモンとメールバードラモンが大暴れして、リニアレールのガジェット第二陣は殲滅された。

一方空中では、これまで静観するに留まっていたギガシードラモンが動き出そうとしていた。

ギガシードラモンは、リニアレールの上に集まっている機動六課のフォワード達に狙いを定め、その途端、雲の子を散らしたように前に出ているデジモン達がギガシードラモンの前から退いた。

「ギガシードストロイヤー!!」

ギガシードラモンの放つ破壊光線が、リニアレールの上にタイキ達めがけて飛んでいった。

「やば、シール・ザ・アイギス!!」

いち早くこの動きにきずいたメデューサモンは、すぐにみなの前に出ると、どこからか取り出した光り輝く盾を掲げた。

メデューサモンの盾にギガシーデストロイヤーが当たり、衝撃で発生した埃が静まった時、

「仮にもタンクモン40体の砲撃にも耐えた盾なんだけど。それなのに盾には罅が入って私が翼と腕を犠牲にしてようやくこれだけ……」

メデューサモンの取り出した盾は、輝きを失い罅だらけになっていた。そして盾を持っていた両腕は傷だらけになっており、衝撃から皆を護った翼は、半分以上の羽を失っていた。そして、後ろの六課メンバー達は、重症というほどではないが皆怪我をしていた。

「次の砲撃には耐えられないよ。高威力の砲撃で一気に殲滅した方がいい。まだ全然本気の威力は出てないからすぐに第二射が来る。」

メデューサモンは苦し紛れにタイキ達に告げた。そしてタイキは考えた。何を使えば有効か、と。

「スパロウモンもベルゼブモンも居ない。この状況で……」

辺りを見回した時、割と傷の浅いグレイモンとメールバードラモンが眼に入った。

「閃いた!!」

タイキは一つ作戦を思いついた。

その頃、ディアナモンの幻影の中では、同じようにフェイトがある事を閃いていた。そして、閃いた途端に、

「なのは!今すぐディバインバスターを放てる?!」
と訊いた。

「え?まあやろうと思えば出来るよ。」

突然の事に驚いたなのはだったが、できない事でもないのだから答えた。

「それから、えつと……？」

次にディアナモンを見て言葉につまった。お互いに名前を知らなかったのだ。

「ディアナモンです。」

ディアナモンはすぐにこう言った。

「ディアナモン、この場所だけ幻影を解除できる？」

フェイトはスパロウモンの向いている方向を指差して訊いた。

「出来ますよ。」

ディアナモンは即答した。

「それじゃあ、ディアナモンは私が合図したらその場所の幻影を解除して、そしたらそこになのはがデイバインバスターを放って。あとはみんなスパロウモンにしがみ付いていればいいから。」

フェイトは、この場にいる皆にこう説明すると、スパロウモンにくっ付いた。

特にする事を言われなかったベルゼブモンも同じように空いた手でスパロウモンの翼を掴んだ。

「今だよ！」

フェイトの合図と共にディアナモンは、フェイトに言われた場所の幻影を解除した。敵の攻撃が入ってくる前に、

「デイバインバスター！！」

なのはが得意とする、桃色の魔力光線が放たれた。突然の攻撃に驚いたのか、空中のデジモン達は一瞬だけその光線の道筋からそれた。行って！スパロウモン！」

その途端、幻影全てが消えたと同時に、黒と黄色の混ざった光の矢がデジモン達の間通り去った。群れの中から飛び出したスパロウモンは、そのままりニアレールへと向かって飛んで行き、そのまま激突した。

「スパロウモン・ソニックフォーム、二度と使わないようにしよう。」

フェイトは、自分の切り札である「ソニックフォーム」を自らでは

なく、スパロウモンに装備したのだ。結果、スパロウモンのスピードは一時的に増したがブレーキが利かなくなり、みんなそろって激突したのだ。

突然の結果に呆れながらも、気にする必要のある要素がもう無い、と判断した工藤タイキは、

「みんな、今から黙って俺の指示に従ってくれるか？」

と、仲間のデジモン達に訊いた。

「俺はタイキに従うぜ！」

「勿論だ。」

と、シャウトモン×2とドルルモン、

「いいだろう。」

「お前はキリハが認めた男、従うのも吝かではない。」

と、メールバードラモンとグレイモンが答えた。

皆の答えを聞いたタイキは、クロスローダーを掲げると、

「シャウトモン×2、ドルルモン、グレイモン、メールバードラモン、デジクロスー！」

と、叫んだ。そして四体のデジモンが光に包まれ、その光が静まると、身体の大きさは完全体のフリードの五倍はあるだろう、巨大な炎の翼を持つ飛竜型デジモンが現れた。

「シャウトモン×3 GMー！」

シャウトモン×3 GMは、合体が完了すると同時に飛び上がり、上空のデジモンの群れに向かっていった。

「ブレスオブペルーンー！」

そして口から吐き出した破壊光線で、ギガシードラモンの周りにいる飛行デジモンを一体残らず吹き飛ばした。

「ブリリアンスタガーー！」

最後に残ったギガシードラモンは、炎の翼でバラバラに切り裂いた。

「ギガシードラモン部隊、全滅。」

モニタの前で件の現場を眺める男に、後ろでパネルを操作していた女は淡々とした口調で言った。

「やはり、ガジェット運搬用のデジモンでは相手にならなかったか。」

男は、残念そうな印象が持てない、むしろ嬉しそうな口調で言った。

「やったねティア！初任務無事に成功だよ。」

スバルはレリックの入った入れ物を抱えながら隣を歩くティアナに言った、しかしティアナは微妙な口調でスバルの言葉に答えた。

今回の事件が、ティアナの心に影を落とした事は、まだ誰も知らない。

第四話 逆転のシャウトモン×3GM（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン

「さて、今回紹介するデジモンは、今話初登場。俺の考えたオリジナルデジモン、メデューサモンです。」

モニタモンA

「我らでは詳しいデータは分からないので、説明をお願いします。」

カットマン

「メデューサモンは女性天使型デジモン、旧デジモンシリーズらしく説明すれば、彼女はウィルス種、世代は究極体だ。必殺技は相手を石化する目で相手を破壊する「バインド・オブ・ゴルゴン」携える剣「アロンダイト」で敵を切断する「スレイ・エレイン」また携える盾「アイギス」で攻撃を防御する「シール・ザ・アイギス」イメージCVは大原さやかさんだ。」

モニタモンA

「そこまで考えてあるんですか。ではどんなデジモンのですか？」

カットマン

「基本は誰かの上に立つか、一人で行動する孤高のデジモンだ。たまに気まぐれで誰かに従う事もあるけど、飽きたらすぐに見限って居なくなるんだと。仲良くなれば割といい奴なんだけど。」

モニタモンB

「扱いが大変ですな。」

モニタモンC

「ところでどうやってクロスハートに入ったの？」

カットマン

「……次回もお楽しみに。」

モニタモン達

「誤魔化したな。」

ブツツ……、ガサガサガサ（テレビの砂嵐の音）

次回予告

骨董品オークションの密輸品取締りと、ガジェット襲撃のさいの安
全警護のため「ホテル・アグスタ」へやって来た機動六課の面々。

そんな彼らに、ガジェットと共に巨大な襲撃者が襲い掛かる。

次回「ホテル・アグスタ、古代竜の襲撃」

五話更新記念の回

ここは、とある管理外世界のとある場所、とある部屋の中。

カタカタカタ、

ここでは一人の男がパソコンの前でキーボードを叩いていた。やがて、その男は立ち上がって伸びをしながらこう言った。

????

「よっしゃ、これで更新したエピソードは五つ。息抜きに取っておいたバカデミーでも見ようっと。自分へのご褒美にアイスも用意してと……」

彼の名は、「超人カットマン」そう、言わずと知れた（多分殆ど知られてない）この小説の作者だ。彼が憩いの時間をすごそうとした瞬間、

????

「何調子こいてんだカットマン!!」

突如、赤い服を着たピンク色の髪の娘にぶっ飛ばされた。

超人カットマン

「って！お前は今度発売される魔法少女リリカルなのはA'sの最新ゲームの主要登場人物の一人「キリエ・フローリアン」じゃねえか!!」

カットマンは驚きの余り説明的な台詞をかました。

超人カットマン

「んで？何しに来たの？」

カットマンは体勢を整えながらキリエに訊いた。

キリエ

「決まってるじゃない、この小説でいつ私に出番が来るか訊きに来たの。」

キリエはさも当然のように言い放った。

超人カットマン

「言っておくが、この小説は「Strickers」を原点にした小説だぞ。A・Sの特別編のゲストキャラクターのお前に出番がある訳ないじゃん。」

???

「では、私の出番も当然無しと。」

すると、どこからか赤い髪で青い服を着た娘が現れた。

超人カットマン

「今度はアミティエ・フローリアンかい。」

キリエの双子の姉、アミティエが現れた。

アミティエ

「ピンクの不肖の妹が迷惑をおかけしました。」

アミティエがカットマンにこう言うと、

キリエ

「それ以前に頭にこないの、私たちの出番無いんだよ。」

キリエはアミティエにこう言った。

アミティエ

「そりゃあ……猛烈に頭にくるよ!!」

何故か爆発したアミティエに、

超人カットマン

「はいはい、今度ミッドチルダ全域で放送されるアニメの先行配信PV見せてやるから機嫌直せ。」

カットマンはブルーレイディスクを取り出して言った。そして、プレイヤーにディスクを入れると、再生ボタンを押した。

これはPV風今後の展開予告である

これは、絆の物語、

(BGM 水樹奈々 Phantom minds)

工藤タイキ「ここは……」

クロスハートが飛ばされたのは、時空の海の第一世界「ミッドチルダ」彼らはそこで機動六課の魔道士と出会う。

八神はやて「うちらがタイキ君がもとの世界に戻るのに協力する、

だからそれまでうちにいてな。」

スバル「私は、皆を守る為強くなりたい。」

ティアナ「証明するんだ、ランスターの弾丸はなんでも貫ける。」

エリオ&キャロ「僕達が護るノみんなの帰る場所を。」

絆と魔道が交錯し、新たな伝説が幕を開ける

巨大な黒い竜に、スターソードでは無くハンマーを装備して立ち向かうシャウトモン×5

トライデントアーム、ギガデストロイヤーでビースト型ガジェットを吹き飛ばすメタルグレイモン

空中からデイベインバスターを放つのは

ハーケンスラッシュと素早い動きでデジモン達の中を掻い潜るフェイト

スターソードを装備し謎の騎士と戦うシグナム

チームクロスハートのあるデジモンの技をまねて、容赦のない連続パンチを放つスバル

攻撃力を持つ幻影と背中合わせになって敵を迎え撃つティアナ

完全体フリードに乗って現場へ向かうエリオとキャロ

空から巨大な魔法を放とうと構えるはやて

上記の映像が順番に流れ、BGMが終わる

緊迫感のあるBGM

彼らの前に現れる謎の少年

少年A「あなた達のやり方じゃ埒があきません。ここは俺に任せて下さい。」

少年B「(はやてに耳打ちしながら)本当はそちらの粗探しに来たんですよ。」

彼らの正体、目的は一体

少年B(街の路地裏にて)「これは、ろくな事は起きないな」

少年A「まさか連中は、D5を企んでるんじゃない。」

カリム「新しく予言が更新されたわ、絆の将と魔王が手を結ぶ時、偽りの竜王の野望打ち砕かれる」

カリムの預言書に追加された、この文の意味は

八神はやて「いまここで、機動六課設立の本当の意味を話すな。」

機動六課設立の本当の意味とは

そして運命の日

???「さあ、一夜限りの宴を始めようか」

謎の人物のこの一言と同時に、山が割れて竜の姿をした怪物が姿を現す。

驚愕の色に染まる機動六課の面々の顔が映った後

工藤タイキ「デジクロス!!」

(アニメ第一話のような感じ) クロスローダーを掲げた工藤タイキの
声が響く

デジモンクロスウォーズ 絆の将と魔道の戦士 始まります

アミティエ

「ちよつと！何よP.V.の中の謎の少年AとB、それなら私たちが出
た方が遥かに読者に分かりやすいんじゃない!!」

カットマン

「確かにそうだが、お前らはまだ情報が少なすぎるんだよ。アミテ
イエは運命の守護者でキリエは時の操手でお互いに争っている。そ
んな設定のお前らが協力して何かしていたりしたら文句言われるよ。」

キリエ

「つまりその二人は最終的には味方になるわけね。」

カットマン

「げ！お前ら謀ったな！」

アミティエ

「そつちが勝手に言ったんじゃない。」

カットマン

「まあいいや、とにかく次の話だが、これから読者の方々の質問を受け付けようと思うのだが。」

キリエ

「つまり？」

カットマン

「この小説の展開や登場人物、登場人物本人への質問を募集し、このコーナーで一つ一つ回答しようと思うのだよ。当然、後者の質問はあくまで小説本編に出ているキャラクター限定だけだね。」

アミティエ

「結局私たちが天下を取る事はないと。」

カットマン

「安心しろ、実は して×××する企画がついこないだ持ち上がったんだ。」

キリエ

「え?!じゃあいずれ私たちがジエネ……モガモガモガ!」

カットマン

「次の話だが、この小説内で人気投票を行っただよ。」

アミティエ

「二次創作小説では恒例のイベントですね。」

カットマン

「一票を入れる方は、感想欄に投票するキャラクターの名前を書いて下さい。但し、投票が有効になるのは小説本編に登場したキャラクターのみになるので悪しからず。」

アミティエ

「とりあえずキリエは悪さをしないよう縛っておきましたから。」

カットマン

「そうか。じゃあアミティエ、何か適当にデジモンを言ってみてくれるか。」

アミティエ

「?じゃあデッカーグレイモンとか?」

カットマン

「そうそう、こうしてデジクロスしたデジモンに票を入れた場合、そのデジクロスを構成するデジモンにそれぞれ票が入る。例えばシヤウトモン×4Bに票を入れた場合、シヤウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、ベルゼブモンに票が一票ずつ入る。」

アミティエ

「票を入れたいデジモンが二体以上いた場合の裏技って訳ですね。」

カットマン

「そういう事、でもそろそろ時間切れだから今日はここまで。」

アミティエ

「それでは今後の展開をお楽しみ下さい。」

二人

「それじゃあまたね」

キリエ

「モガモガモガ（縄を解け！！）」

最後にキリエの届かぬ叫びが響いた第二回目であった

五話更新記念の回（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー!!」

カットマン

「気を取り直して始めよう、今回のテーマはスターモンズ。」

モニタモンA

「スターモンは突然変異型のデジモン、必殺技は連れ歩いているピクモン達を投げつけて攻撃するメテオスコール。」

カットマン

「スターモンズは一体のスターモンを中心に、数多くのピクモンが集まって構成されているチームなんだ。落語会のような厳しい修業と上下関係を乗り越えた強者が新生代のスターモンになれるんだ。」

モニタモンB

「ピクモンは基本スターモンには絶対服従ですな。」

モニタモンC

「こりゃ大変だ。」

全員

「次回もお楽しみに！」

第五話 ホテル・アグスタ 古代竜の襲撃

リニアレールの襲撃事件から数日が経過したある日、機動六課のメンバーはヘリに乗ってある場所へ向かっていた。

「今回の仕事場所はここ、ホテル・アグスタ。」

リインが展開したモニタに、わりと綺麗な大きめの施設の映像が映し出された。

「ここで行われる骨董品オークションの人員警護と、違法売買の取り締まり、それが今回の任務。」

なのはが搭乗している面子に仕事の内容を説明した。

「それで、何故人員警護を行うかという、出品される骨董品をレリックと勘違いしたガジェットが攻めてくるかもしれないからです。」

その後リインが、説明に付けたしをした。

「それで、これがレリック収集の大本とされている人物。」

その後、フェイトの展開したモニタには、不細工な訳でも気障っぽく見えるわけでも無いが、見ていると何かと腹の立つ顔の男が映し出された。

「ジェイル・スカリエッティ、違法な研究によって広く指名手配されているの。最もこの捜査は私がするんだけど。」

「とりあえず、みんなも顔だけは覚えててくれな。」

ここで、タイキに抱かれているピンク色のデジモン「キュートモン」が、

「ねえシャマル先生、下においてある荷物はなにっキユ?」

と、シャマルにたずねた。

「ああ、これね。隊長三人のお仕事服。」

と、シャマルは答えた。

数分後、機動六課メンバーはホテル・アグスタに到着し、前日から現場ではっているヴィータ、シグナム両副隊長と合流した。そして隊長三人は、

「こんにちわ、機動六課です。」

シャマルの言うお仕事服を着て、ホテルの中でも選ばれた人しか入れないオークション会場とその周辺に入っていた。いつもの制服では無く三人共ドレス姿なので、なんの違和感も無く入る事ができた。

その頃、リインとスバル、は何をしていたかと言つと、

「リイン曹長、何しているんですか？」

スバルは自分の頭の上でパネルを操作するリインに訊ねた。

「お仕事半分、趣味半分、この間の出勤についての業務日誌を付けてるですよ。」

と、リインは答えた。

スバル自身も、あの事件の後小さい出勤が数回あったので、現場の空気には慣れたようだった。

一方ティアナは、自分が所属する部隊について考えていた。

「今の六課の戦力は無敵どころか無茶苦茶すぎる、隊長三人は普通にSランク越えの魔道士で副隊長でもAAランクは普通。スバルは訓練校は主席で卒業の優等生だし、父親と姉は管理局の歴戦の勇者エリオはあの歳ですでにBランク所持で、キャロはたださえ珍しい召喚魔法の中でも強力で珍しい竜召喚士。」

そして、極めつけは民間協力者の工藤タイキである。彼はクロスロ

「ダーと呼ばれる不思議な機械を使い、デジモンと呼ばれる下手な召喚獣よりも強力な生き物を操り、拳句の果てには合体させて一つの戦士を生み出す。人を牽きつける魅力があるのか、デジモン達は皆彼を慕っており、凶暴すぎる為使役不可能とされるグレイモンですら彼には従うそぶりを見せている。」

また、彼本人には魔道士ランクAに相当するだけの魔力を持っており、持ち前の的確な判断力を用いて魔道士になれば、あつという間に出世街道をまっしぐらに進んでいくだろう。

「やっぱり、この部隊で凡人なのは私だけ。」

今になって考えれば、自分だけがこれといって飛び出た才能や特技がない事を改めて実感した。

「でも関係ない、私はここで証明する。ランスターの弾丸は何でも貫ける。」

ティアナはクロスミラーージュを見つめてこう思った。

一方、ホテルの中に入ったなのは、フェイト、はやてはというと。なのは、はやてはオークション会場のホールに、フェイトは外の廊下にいた。

「さすがに会場内の警備は嚴重だね。」

ちらほらと客の入りだしたホールを見渡しながら、なのははやてに言った。

「これなら、大抵のアクシデントには普通に対応できそうやな。」

はやてもなのはと同じように周りを見渡したら、出来る事なら何も起こらないことを祈った。

そしてフェイトは、廊下を歩きながら怪しい人物が居ないか確認していた。

「オークション開始まで後どれくらい？」

「2時間と23分です。」
バルディッシュの答えを耳で聞きながら、フェイトは会場へと戻っていった。

一方、ホテルより数百メートル離れた森の中に、黒いコートを着た背の高い男と黒いローブを身につけた少女が居た。

「どうしたルーテシア？お前の探し物はここにはないだろう。」
男はルーテシアと呼んだ少女に言った。

「でも、ドクターの探し物があそこにあるって。」
少女がこう言うと、彼女に連絡があった。

「ごきげんようルーテシア。ゼストやアギトも一緒かね。」
ルーテシアが開いたモニタに映ったのは、他でもないジェイル・スカリエッティだった。

「ごきげんようドクター、探し物？」

「ああ、先ほども話したがあの建物に私の探し物があるから、探して持ってきて欲しいんだ。」

挨拶もそこそこに、スカリエッティは単刀直入に話題に入った。

「いいよ。」

ルーテシアは即答した。

「ありがとうルーテシア、今度お茶とお菓子でも奢らせてくれ。」

スカリエッティがこう言うと、ルーテシアの手の甲に付いている寶石のような物が一瞬光った。

「君のアスクレピオーズに詳しいデータを送つといた。」
すると突然、

「お話中失礼します。」

新しいモニタが開いて、紫色の髪的女性が映し出された。

「ウーノか、どうした？」

思わぬ乱入者に、ルーテシアでは無くゼストが答えた。

「そちらに”彼”は来ていませんか？」

ウーノと呼ばれた女性は単刀直入にこう訊いた。

「すまないが見ていない。」

ゼストは即答した、

一方ルーテシアは、指に止まっている画鋲に羽が生えたような生き物に少し話しかけた後、

「私の虫達が探してくれるって。」

と、ウーノに言った。

「では、よろしく願います。」

ウーノはこう言うと、通信を切った。

「では、健闘を祈っているよ。ルーテシア。」

そに続き、スカリエツティも通信を終えた。

「行くのか？ルーテシア。」

ルーテシアが脱いだローブを預かりながら、ゼストは訊いた。

「ゼストやアギトはドクターの事を嫌ってるけど、私はドクターは嫌いじゃないから。」

そう言うと、ルーテシアの周りに小さい虫が大量に現れた。

そして、ゼストとルーテシアがいた場所から更に数百メートル離れた場所では、他よりも少し高い木の上に竜を模ったプロレスで使うようなマスクを身につけた少年が居た。

「折角だし、俺達も参加しよう。」

数百メートル遠くにて交わされた会話を傍受していた彼がこう言う
と、

「なら私が行くぞ。」

彼の腰から女性の声が響いた。

「いいのか、お前が行ったらホテルと一緒に探し物はおるかこの辺

り一体が消し飛ぶだろ。」

その後すぐに、馬鹿にするような声が響いた。

「五月蠅い！ちゃんと手加減できるわ！それに、少し戦場を引っこき回すだけで良いんじゃない？」

女性の声がこう反駁すると、

「そういう事、それじゃあよろしく。」

少年はこう言って、腰につけていた水色の機械を掲げた。その瞬間、途轍もない生き物が姿を現した。

「それで、これをこうするの。」

「うーん、全然わからないっキユ。」

屋上で警備にあたっていたシャマルとキュートモンは、余りにやる事がないのであや取りをしていた。

筈をつくり、次に星をつくろうとしたら、

「敵反応？！今も増大中。」

自分の指輪型デバイス「クラールヴィント」に反応があった。

「みんな！敵よ！」

シャマルはデバイスを通して副隊長とフォワードに連絡した、

「スターズ3、了解！！」

「スターズ4、了解！！」

警備をしていたスバルとティアナは、連絡が来るなりすぐさま現場へと向かっていった。

一方、青い大型犬「ザフィーラ」と地下駐車場を警備していたエリ

オとキャロにも連絡が来た。

「では我が先行して厄介な敵を潰す。お前達は入り口前を固めるんだ。そこが護りの要となる。」

ザファイラは、二人に的確な指示を出した。しかし、

「え、ザファイラって喋れたの?!」

突然の襲撃より自分が喋れることのほうが余程驚きだったようだった。

副隊長が先行していつてから少したった所で、驚くべき事が起こった。突如入り口を固めるフォワード四人とタイキ達の前に魔方阵が現れ、そこからガジェットが大量に現れた。

「空間転送?! サーチャー作動させます。」

ロングアーチスタッフからの連絡が入りタイキも行動を開始した。

「リロード! モニタモン!」

すると、クロスローダーの中から緑色の忍装束を身に付け、背中にリュックを背負った、頭部がテレビの形をした忍者型デジモンが現れた。

「このあたりに魔道士が居るみたいだから探して姿を写してきてくれ。」

「分かりましたな。」

タイキの指示を受けた三人のモニタモンは、ガジェットのリーダーの隙をくぐり抜けて森の中へ入っていった。

「さて、いっちゃやるか!」

シャウトモンがいつものようにマイクを構えながら言ったとき、現場指揮を担当しているシャマルから連絡が入った。

「更に巨大な敵反応が接近中!」

その報告が来た瞬間、体長は以前見たギガシードラモンには劣るもそれでもなお巨大と言っても過言ではない黒い竜型のデジモンが現

れた。

「な、何あれ。」

「フリードどころかボルテールより大きいかも。」

突然の巨大な襲撃者に、ティアナとキャラは驚きを隠せなかった。しかし、

「か、か、か、格好いい!!」

スバルとエリオは目をキラキラさせて喜んでいた。

「あ、あの、エリオ君。なんで喜んでるの。」

と、キャラが訊くと、

「だってドラゴンだよ、ドラゴン!この世にドラゴンとメカに興奮しない男子は居ないよ。」

エリオは若干興奮気味だった。

「な、あれはインペリアルドラモンじゃ!」

しかし、クロスローダーから出てきたジジモンは驚きを通り越して驚愕といった様子だった。

「インペリアルドラモン?」

みんな聞いたことの無い名前を聞いたので、そろってジジモンに聞いた。

「昔デジタルワールドに存在した究極の古代竜型デジモンじゃ。生き残りがおったのか!」

タイキは突然の強敵に対応する為、クロスローダーを掲げると、

「リロード!クロスハート!!」

リリモン、ナイトモン、ポーンチェスモンズ、リボルモン、ベルゼブモン、ディアナモン、メデューサモン、そしてバグラモンとの最終決戦の後仲間になった、ブルーメラモン、ルーチェモン、ピノツキモン、スパードモンを出現させた。その後、

「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、スパロウモン、デジクロス!!」

再びクロスローダーを掲げ叫んだ、

「シャウトモンx5!!」

シャウトモン×3以降の一本角の生えた頭部から、三日月形の角が生えたトゲトゲした頭部になり、左腕にスパロウモンの胴体、背中にスパロウモンの翼がついたデジモンが現れた。

「×5、上空で奴を牽制してくれ！」

「応よー！」

タイキの指示と同時に、シャウトモン×5は空へ上がりインペリアルドラモンと交戦を開始した。

「フラウカノンー!!」

「ジャステイスブリッドー!!」

「グランドクロスー!!」

一方地上では、フォワード四人とクロスハートのデジモンで守りを固めていた。リリモン、リボルモン、ルーチェモンの放った光弾がガジェットへ飛んでいき、敵を打ち抜くかと思ったら、ガジェットは紙一重で攻撃をかわした。

「え？いきなりどうしたの？」

「どうやら、自動操縦から手動操縦に変わったようですぞ！」

リリモンの驚きに、ナイトモンが答えた。

そんな中、後ろで援護に徹していたティアナは、

（そんな事は関係ない）

と考え、一度に大量のカートリッジを消費し、自分の周りに弾丸のカートンを展開した。

「?!無茶よティアナ！一度にそんな量を放つなんて。」

現場の指揮をしていたシャルは、突然のティアナの行動に驚き、ティアナに声をかけたが、肝心のティアナはそれを聞かず、全ての弾丸をガジェットに放った。

飛んでいった弾丸は、ガジェットに次々と命中していったが、たっ

た一発だが先行して敵に当たっていたスバルめがけて飛んでいった。突然の事にスバルは驚いた、自分の元にめがけて弾が飛んでくるのだから。シャマルの連絡でフォワードの戦いぶりを見に来たヴィータが全速力で向かうもとても間に合わない。もう駄目だ、と思った瞬間、タイキは、

「デジメモリ！スレイプモン！オーディンズブレス発動！！」

クロスローダーに、赤い鎧を装備した馬の姿をした騎士の絵が書いてあるメモリを突き刺した。すると、スバルの目の前に絵に書かれた騎士が現れ、左手に装備された盾で飛んできた弾丸を防ぎ、更に発生した冷気でガジェット全てを凍りつかせ身動きを封じた。

「気候すら操る聖盾ニフルヘイム、弾丸一発を防ぐには贅沢すぎるな。」

一方、上空でシャウトモン×5と戦っていたインペリアルドラモンは、地上での戦いを眺めながら言った。

「おいおい、戦っている最中に余所見かよ！！」

シャウトモン×5は、スターソードでインペリアルドラモンを斬りつけながら言った。

「まあ、今の私の力は全力のおよそ3%だ、これくらいの余裕はある。」

対するインペリアルドラモンは、巨大な爪で剣を受け止めながら答えた。

「冗談だろ！インパクトレーザー！！」

「ポジترونレーザー！！」

シャウトモン×5は、持ち前のスピードで距離を取り、左腕に装備された銃からレーザーを発射するも、インペリアルドラモンは背中の砲台から発射されたレーザーでかき消された。

「メガデス!!」

続いて、インペリアルドラモンは口から暗黒物質の含まれた火炎を吐き出した。炎に飲み込まれたシャウトモン×5はそのまま墜落し、タイキ達の元に落ちてきた。

「×5?!」

タイキは落ちてきたシャウトモン×5を見た後、上空のインペリアルドラモンを見た。奴は攻撃しようとしてはいるが、何かを気にしているのか上空を旋回し、牽制と様子見に徹している。

（ひょっとして）

と、タイキは思うと、

「ディアナモン、地下駐車場を見に行ってくれるか。こっそりと。」

と、ディアナモンに耳打ちした。ディアナモンは、わかりましたと手振りで合図し、そのままこっそり地下駐車場へ向かっていった。

その後、上空のインペリアルドラモンを見て、

（×5Bじゃ奴の不意を突くことはできない。×5のスピードを損なわず一撃の威力を上げるには…）

と考え、あたりを見回した。そして、ヴィータがガジェットをハンマー型デヴァイス「クラーファイゼン」でぶん殴っている所と、その隣で「ブリッドハンマー」を放つピノッキモンが目に入った。

「これだ!!」

と、タイキは叫ぶと、クロスローダーを掲げて、

「シャウトモン×5、ピノッキモン、デジクロス!!」

と、叫んだ。すると、シャウトモン×5とピノッキモンが合体し、背中の翼が×の字型に変わり、スターソードがピノッキモンのハンマーを取り込んで変形した武器「スターハンマー」を装備したシャウトモン×5が現れた。

「クロスアップ! シャウトモン×5!!」

そして再び、インペリアルドラモンへ向かっていった。

「ポジترونレー!!!」

インペリアルドラモンは背中の砲台から発射するレーザーで迎え撃

とうとしたが、スピードアップしたシャウトモン×5の攻撃をくらい未遂で終わってしまった。

「いくぜ！ネオメテオバスターアタック！！」

インペリアルドラモンへの攻撃の後、素早くさらに高い場所まで飛んだシャウトモン×5は、ハンマーを掲げ急降下を開始した。そのまま背中につつまみ、インペリアルドラモンの巨体を地面に叩きつけた。

「やったか？」

発生した砂煙が晴れた時、インペリアルドラモンは姿を消していた。

「何？！いねえ！！」

「恐れをなして逃げちゃったんでしょうか？」

グイータ、キャロの両名はあたりを見回しながら言った。

「いや、目的がすんだから撤退したんだろう。奴の狙いはどう考えても俺たちの気を引くことにあつた。」

「え？」

タイキの分析には、皆が驚いた。

その頃、警備が手薄になった地下駐車場では、人間の大人と同じくらいの大きさの生き物が、トラックから荷物を小脇に抱えて出てきた。足元にはこれまで警備をしていたが、その生き物に倒されたのだろう人間が数人いた。

早速生き物は荷物を持ってこの場から去ろうとした。しかし、

「動かないで、動いたら粉々にするよ。」

突如背後から発生した冷気に動きを止められてしまった。ディアナモンが現れたのだ。

「逃げたいのならご自由にどうぞ。でもそれは置いて行ってもらふよ。」

二人の間に緊張感が走ったその時、

「クラクラクラー！」

どこからかクラゲのような白い生き物が飛んできてディアナモンに張り付いた。

「あ、何なのよコイツ。え？、ちよつと待ってそこはダメー！」

クラゲのような生き物が何をしたのかは不明だが、とにかく謎の生き物はディアナモンから逃げ出した。

「うん、とりあえず襲撃者の殲滅には成功したみたいだね。」

「そうやな、私らの出番は無かったな。」

会場内のはとはやては、外の部下からの報告を見ながら言った。すると、舞台の上の演台に司会者が現れ、

「それでは、オークション開催に当たりまして、鑑定にあたって頂く考古学者の先生に挨拶を頂きたいと思います。ユーノ・スクライア先生です。」

件のオークションも、襲撃者が居なくなったところで始まった。

その頃、会場からしばらく離れた場所では、

「どうだった？」

竜のマスクを被った少年は、水色の機械に語りかけた。

「とりあえず、例のブツはちゃんと回収できたようです。途中妨害に入った者を妨害した時、俺の仲間が数体けがをしましたが、まあそれくらいです。」

水色の機械からは、報告をするような台詞が響いた。

「そう。」

少年はこう言った後、ホテル・アグスタの方角を向いて言った。
「工藤タイキか、もっと面白くなるといいな。」

第五話 ホテル・アグスタ 古代竜の襲撃（後書き）

カットマン

「カットマンとー!!」

モニタモンズ

「モニタモンズのー!!」

全員

「デジモン紹介のコーナーー!!」

モニタモンズ

「さて、今回のテーマはキュートモン。」

カットマン

「キュートモンは大きい耳を持ち、耳当てが特徴のデジモンだ。得意技は手で触れた部分の傷を瞬く間に治療する「キズナオール」とてつもない音程の歌で敵を攻撃する「ハイパーソニックウェーブ」だ。」

モニタモンA

「案外いたずら好きな性格で、時々いたずらのため人前に出てくるんですな。」

モニタモンB

「それより、シャル先生とはどんな関係になるんですかな。」

全員

「確かにー?」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

失敗をおかし、すっかり調子が落ちたティアナ。ドルルモンは彼女をどう見るのか。

次回「ティアナの失敗、ドルルモンの過去」

第六話 ティアナの失敗、ドルルモンの過去

「よし、それはあっちへ持ってけ！」

ここは、一騒動あった後、無事にオークションを終えたホテル・アグスタ。機動六課の面々は、事後処理活動をしていた。

工藤タイキも積極的に作業に参加している。ふとそこへ、

「なあタイキ、ドルルモンを見てないか？」

リボルモンが現れタイキに訊ねた。

「ティアナと一緒にいるはずだけど…見てないのか？」

「それが、ティアナのところにも行ってみたけど、いなかったんだ。」

こう答えたりボルモンに、今度はタイキが、

「ところで、ティアナ本人はどうしてた？」

と、訊いた。彼にしてみれば今一番気になる事である。いわゆる「ほっとけない」である。

「うーん、負のオーラで覆われているみたいで近寄れなかった。」

リボルモンの答えを聞いたタイキは思った。レイクゾーンの二の舞のような事態にならなければいいが、と。

「うーん、ありませんね。」

背中に白い羽をたくさん持った天使型デジモン「ルーチェモン」は、あたりを見回しながら言った。彼は今、謎の襲撃者である「インペリアルドラモン」の痕跡を探しているのだ。

「お、これは。」

突然、一緒に同じことをしていた「ワイズモン」が声をあげた。彼の目線の先には、大きいわけではないが、金色の塊が落ちていた。

「間違えない、これはインペリアルドラモンの爪の欠片だ。」

「じっくりしらべる価値がありますね。」

二人は、サンプルを慎重に回収しながら言った。

「何か見つかったの？」

ふとフェイトが話しかけてきた。

「ああフェイトさん。重要なサンプルを調べたいんで、今度実験室を借りたいんですけど。」

これは良かったとばかりにルーチェモンは言った。

「うん分かった。今度私からシャーリに掛け合ってみるよ。」

フェイトは、ワイズモンが持っている「インペリアルドラモンの爪の欠片」を見ると、ほぼ即答と言えるタイミングで答えた。

「……ところで、あそこにいる彼は？」

今まで黙っていたワイズモンだったが、なのはと仲良さそうに会話する薄い金髪の青年を見てフェイトに訊いた。きっと自分と同じ二オイがするのであろう。

「ああ、彼はユーノ・スクライア。考古学者で私たちの十年來の友人、そしてなのはの魔法の先生。」

フェイトは淡々と説明した。

「やはりな、彼とは一度いろいろ話したいものだ。」

フェイトの説明を聞いたワイズモンはこう呟いた。この時、フェイトには二人が仲良く話す構図と一緒に、フェレットとなったユーノを解剖しようとするワイズモンの構図が浮かんだのは言うまでもない。

「それにしても、なのはさんの先生にしては若すぎませんか。」

ルーチェモンは先生と言われ、英雄の息子に勉強と格闘技を教えた麵類爺や、かつては世界最強と謳われたエロ仙人のような人物を連想したのだろう。フェイトにこう聞いた。

「なのはが魔法に関わるようになったのが9歳の時だから、同い年

とはいえユーノの方が経験は豊富だったから。」

とフェイトが言うと、

「なるほど、今の二人の関係は友達以上恋人未満といったところか。」

ワイズモンが遠目に観察しながら言った。おそらく何らかの方法で二人の顔の体温や、心拍数を調べたのだろう。

「そうなんだけど二人ともまるで進展しないんだよね。二人とも仕事中毒だから。なのはうちの部隊で副隊長兼教導官だし、ユーノは無限書庫の司書長だから。」

フェイトがこう言った時、

「無限書庫ってなんですか？」

ルーチェモンが食いついた、

「いろんな次元世界の本を集めた図書館のような場所のことです……」
フェイトがここまで言った時、

「何！！この世界にはそんなに素晴らしい場所が存在するのか！！」
！！」

今度は目をキラキラと輝かせたワイズモンが食いついた、

「うん、今度連れて行ってあげてもいいけど……」

フェイトは半ばひいた状態で二人に言った、ルーチェモンとワイズモンは本がたくさんある書庫の様子を思い思いに連想していたからである。

この事件の後、しばらくは事件は起こらず、機動六課の面々は日々訓練漬けの生活に戻った。ある日、変化が訪れた。ティアナー人が皆と離れ、夜中に一人で特訓をするようになったのだ。

「あんまり無理するなよ、明日の活動に差し支えるぞ。」

みかねたドルルモンは、彼女に声をかけた。

「分かってる、でもこれくらいしないと間に合わないの、凡人だから。」

ティアナは、元々強いあなたには分からないでしょう、とも言った。対してドルルモンは、

「そんな事はねえよ、俺なんてタイキやシャウトモンがいなけりや何もできねえよ。」

と言った。そして、

「強くなるのはいいが、半端な力を持ったところでどう努力しようとその力は恐怖の対象にしかない。」

こう言い残してその場を立ち去った。その後、偶然寮の入口でスバルと出会った為、思い切って訊いてみた。ティアナが強くなりたがる理由を知らないか、と。

「うーん、もしかしてあれかなあ。」

スバルは、心当たりがある、とドルルモンに言って。ある事件について話した。

数年前、執務官を目指して努力を続ける一人の魔道士がいた。名前は「ティード・ランスター」といい、ティアナという幼い妹がいた。彼はある日、とある事件の犯人を捕まえようとしたが、あと一歩のところまで犯人の攻撃を受け、それが致命傷となり殉職した。犯人はその後、彼との戦闘で疲労困憊となりグロッキー状態になっている所を別の管理局員に逮捕されたらしい。

しかしティードの上司はティードが犯人を捕まえられなかった事が不満だったようで、ティードの最後の仕事の結果と彼の死の事を、不名誉なうえ無意味だった、と評したのだった。

「たぶん、兄の死が無意味ではないと証明したいからこそ、ああして無茶してるんじゃないかな。」

一通り話し終えたスバルはこう言って話をしめた。ドルルモンは少し考えてから、

「無茶を言うようで悪いが、明日も朝早くからあいつは自主練を開始すると思う。この時はお前も参加してくれないか。」

と、スバルに頼んだ。これに対しスバルは、

「うんいいよ、元からそのつもりだったし。」

と、ドルルモンに言った。そして、

「そういえばドルルモンって元々はタイキ達の敵だったんでしょ。なんで今は味方になっているの？」

と、訊いた。さっき答えたんだからお相子でしょう、とも言っている。

「さあな、しいて言えば面倒くさくなったのかな。仲間を大事にしようとしないうちに軍にいるのがさ。」

ドルルモンは、かつて自分がバグラ軍を抜けるきっかけとなった戦場での出来事を思い出して、こう言う、

「ティアナも仲間の本当の存在理由に気づいてもらえばいいが。」
と言って、タイキの部屋に向かっていった。

そしてその頃、肝心のティアナはと言うと、長い練習の中で体力に限界が来始めた。胃の中身をリバーすしなかったのはほぼ奇跡であった。

（証明するんだ、兄さんの魔法は無意味なものじゃないと）

それでもなお動くのは、心に秘めた決意によるものだろう。再び立つて練習を再開しようとした時、近くの窓ガラスに映った自分の顔が歪み始め、ティアナの良く知る人物の顔になった。それは自分の兄、ティーダ・ランスターの顔だった。

「兄さん、なんで？」

ティアナは驚きを隠せないようだった。対してティードは、

「何、妹は元気かなと思って化けて出てきてみたんだ。」

と、冗談を交えながら言った。その後、

「ところで、調子はどうだ。」

と、ティアナに訊いた。

「うつん全然、まだまだ兄さんには及ばないよ。この間は失敗までやっちゃったし。」

ティアナの返答にティードは、

「いいかティアナ、僕たちみたいな部下の失敗には二つのものがあるんだ。」

真面目な顔で言った。

「一つは真正正銘の自分の失敗、二つ目は上司の責任転嫁の皺寄せ。後者は割と多いけど、前者は予想以上にまれだったりするのさ。でもまあ、今する話でもないか。」

そしてその後、

「お前だって凡人なんかじゃない。それを嫉妬して分かつうとしない相手には、力づくでも見せつければいいんだ。」

と言った。すると、

「そう、私は凡人じゃない。力づくでも分からせる……」

ティアナは意識が朦朧とするのを感じた。一瞬だけ何かが入ってくる感じがしたのが最後だった。

「そう、お前は凡人じゃない、力づくで分かせてやれ。」

ここはミッドチルダのとある場所。ここでは一人の女が鏡に向けて呟いていた。

「いい子ねティアナ、私が合図を出すまで普段どおりにしていなさ

い。」

そして、鏡に映った自分の顔を見ながらほくそ笑んだ。

「レイクゾーンのあの女の子より使えそうな子ね。しばらく自由にさせておくとするか。」

そして翌日、早起きしたティアナとスバルは早速特訓を開始した。

日頃の訓練もさることながら、自主練では手数を増やす練習をしたり、熱心に研究を重ねた。当然困難にぶち当たる事もあったが、そこはスバル、エリオ、キャロ、タイキ達がサポートし、着実に皆は繋がりを深めていったはずだった。

そして、問題の日となった。

「さて、今日は2対1で模擬戦をするよ。」

一通りの訓練の後、なのはが皆に言った。

「最初はスターズ、ライトニングはその間ヴィータ副隊長と見学だよ。」

なのはにこう言われ、スターズはバリアジャケットを装備し、ライトニング部隊の二人はヴィータ、タイキ達とホログラムのビルの屋上に上った。

「ええ、模擬戦もう始まってるの？」

すると、フェイトが慌てながらやってきた。本人いわく、自分が模擬戦を担当しようと思ってきたらしい。

「最近のなのはの訓練密度濃いからな。夜遅くまで新人どもの訓練の映像見て分析も行ってるし。」

ヴィータがこう言うと、

「いつも見てくれてるんですね。」

エリオも隣で言った。

「本当にそうかな？あいつが何を指して指導を行っているのかしつかり新人に伝わっていないなら、まだまだあいつの指導は不完全だな。」

しかし、ドルルモンはこう言っている。ヴィータは言い返そうとしたが、模擬戦が始まったので、そこに注目した。

スバルはいつも通り、気合で真っ直ぐなのはに突っ込んでいった。しかしティアナは、速いと言えば速いが味方まで危なくなるような弾道の弾を沢山放っている。

「ティアナの奴どうしたんだ？」

ヴィータは早くも気が付いた、

「スバルを囷に使ってる。」

なのは本人も気が付いているだろうが、あまり気にしていないのか、それとも含むところがあるのか。模擬戦を続行している。そして、

「防御を抜いてバリアジャケットを切り裂く、一撃必殺！！」

なのはの不意を突く形で、刃のエネルギーを放出した銃を振り下ろした。

「レイジングハート、モードリリース。」

なのはは静かにこう言うと、素手でスバルの拳とティアナの刃を受け止めた。

「ねえ、私の教導ってそんなに間違ってる？」

二人にこう言うなのはの口調は、静かだが槍のように突き刺さるものだった。ティアナは言われた瞬間にその場を離れると、

「私は！何も失いたくないから！強くなりたいんです！！」

力の限り叫び、なのはめがけて大量の弾を発射した。

「頭…冷やそうか…」

なのははこう言うと、大量の弾丸と共に一発のエネルギー波をティアナに打ち込んだ。

威力を加減し、なおかつバリアジャケットで守られているとはいえ、これだけの一撃を打ち込まれたからには普通は無傷では済まない。しかし、ティアナは無傷で立っていた。一人の和装束の女に守られて。

「あらあら、せっかく見に来たのにその光景が仲間割れのところなんてね。」

現れたのは、旧バグラ帝国軍の三元士、色欲を司る魔王型デジモン「リリスモン」だった。

第六話 ティアナの失敗、ドルルモンの過去（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン

「今回のテーマはスパロウモン。スパロウモンは飛行機のような姿をした鳥型デジモン。必殺技は、所持した銃を乱発する「ランダムレーザー」翼に仕込んだ刀で相手を斬る「ウィングエッジ」高速で体当たりする「クラッシュムーブ」だ。」

モニタモンA

「飛んでいるときの動きを見れば、その時の調子はおろか、その時の機嫌まで分かる実に単純なデジモンですな。」

モニタモンB

「となると、やたらとアクロバットな飛び方をしていると、間違えなく浮かれてるいう事ですな。」

モニタモンC

「おやつあげたら曲芸するかな。」

カットマン

「それはともかく、スパロウモンが「ランダムレーザー」を撃つときに使う二丁の銃は「サナオリア」と言って、かのベルゼブモンが使う銃「ベレンヘーナ」を作った人が作ったんだよ。」

全員

「それじゃあまたね!!」

次回予告

突如機動六課を襲撃したリリスモン。ティアナを人質に組織を壊滅をたくらむリリスモンは、真に王たる人物についてタイキ達に言う。タイキはリリスモンの脅威から皆を守るため、全戦力を叩きこむ。

次回「リリスモンVS機動六課&クロスハート」

第七話 リリスモンVS機動六課& a m p・クロスハート

「あらあら、せっかく来たのに仲間割れの最中なんてね。」

突如現れたリリスモンは、静かな声で言った。

「リリスモンだと?!」

「なんであいつが?」

クロスハートの面々は一様に驚いている。

「あの人だれ? タイキの知り合い?」

スバルが訊いた、

「あいつはかつてデジタルワールドに覇を唱えようとしていたバグラ軍三元士の一人リリスモンだ。」

スバルの問いに、いっしょに模擬戦を見学していたピノッキモンが答えた。

「久しぶりだねえ、工藤タイキ。」

リリスモンはタイキの方を向いて言った。

「何のようだ、リリスモン?」

タイキはリリスモンに訊いた。

「ふふ、作戦行動よ。機動六課の戦力と顔ぶれを確かめて来いと命令をもらったの。」

と、リリスモンが言うのと、

「しかしご苦労なもんだな。もういないバグラモンのためにまだ世界征服しようとしてるのかよ!」

とシャウトモンが言った。

「バグラモン? まさか、私はそんな紛い物の王に仕えるつもりはないわ。私が今仕えているのは真に王たる王、確か竜王だったかしら。」

シャウトモンの問いに、リリスモンはこう言った。

（真に王たる王? 竜王?）

タイキはリリスモンの一言が気になったが、本人のいう事をそのま

ま解釈すれば、少なくとも味方としてここに来たわけではない、と考えたので。

「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、ベルゼブモン、デジクロス!!」

と、クロスローダを掲げて叫んだ。

「シャウトモン×4B!!」

クロスローダーの光がデジモンたちを包み、光が弾けると、シャウトモン×4に黒い足が追加された、ケンタウロスのような姿の合成型デジモンが現れた。

これだけでは終わらない、

「メデューサモン、ナイトモン、ポーンチェスモンズ、デジクロス!!ピノッキモン、リボルモン、ブルーメラモン、デジクロス!!グレイモン、メールバードラモン、デジクロス!!」

次々とデジモンをリロードし、次々とデジクロスさせた。

「メデューサモンNP!!」

リボルバーメリケン

「ピノッキモンRM!!」

「メタルグレイモン!!」

デジモン達を包む光が次々と消え、クロスハートの戦力が現れた。

「おいおい、いくらなんでも私一人にこの戦力は大袈裟なんじゃないかい?」

リリスモンは、味方から見れば壮観とも言える光景に文句を言ったが、

「どのみち変わらないか、こちらには人質がいるからねえ。」

と言って、傍にいたティアナの首筋に自分の爪をあてがった。

「って、ただ首筋に爪を当ててるだけじゃねえか。」

グイータは、いざという時のためにバリアジャケットを身に着けながらリリスモンに言った。しかし、

「うっん、あれが爪というだけでもう、それこそクラナガンと同じ表面積がある隕石が落ちてきた並みに大変なのよ。」

メデューサモンNPは、それこそ今の比喩と同じ状況に立ち会った

観測者となったようにヴィータに言った。

「それに今のままじゃティアナの救出もできねえ。あいつが動けないと何ともならねえ。」

シャウトモン×4Bも困ったように言った。

「そこまでよ!!」

その時、どこから聞いたことのある声が聞こえてきた。見ると、模擬戦を見学していたメンバーのいたビルの屋上に、バリアジャケツトを身に着けたティアナが現れた。

「ええ!!」

「ティアナ?!なんで?!」

この様子を見た機動六課、クロスハートの面々は驚いた。それはもちろんリリスモンも同じである、

(なにあの子?本物はここにいるはず...)

リリスモンが、ほんの一瞬ではあるが自分の手元のティアナから目を放した。その瞬間、銀に光る矢のような何かが、リリスモンの手からティアナを救出した。

「とりあえず成功みたいですな。」

ティアナの救い主は、どんな環境に置かれても過剰着衣なんじゃないかと思われる分厚い防寒着の重ね着を脱いだ。そこから現れたのティアナモンであった。

「うまくいきましたな!!」

今までティアナが立っていた場所には、ふつうのモニタモンより少し大柄で、黒い装束を着たモニタモンが現れた。

「そうか!!だからティアナモンは「ハイビジョンモニタモン」を貸してくれ、って言ったのか!」

タイキは、以前ディアナモンがハイビジョンモニタモンを借りていった事を思い出した。ディアナモンはこんな事態になった時のために、自分の幻を見せる能力で作り上げたディアナの幻をハイビジョンモニタモンに録画させ、いざこの事態になった今、ハイビジョンモニタモンに幻ディアナを幻影という形で再生してもらい、自分が決死の救出を行ったのだ。

「でも、なんであんな厚着？無い方が動きやすいんじゃない？」

スバルが疑問を口にするのと、

「よく見ている、その理由が今からわかる。」

と、メタルグレイモンが言った。

すると、ディアナモンが脱ぎ捨てた数多くの防寒着がドロドロと溶け始め、最終的には消えてしまった。

「えええ！！」

「腐って溶けちゃった？！！」

見ていた機動六課のメンバーは一樣に驚いた。

「あれがリリスモンの必殺武器「ナザルネイル」触れた物質という物質を腐らせる効果があるというのは聞いたことあったけど、見たのは初めてだな。」

機動六課の面々に、どこからか現れたスパロウモンが説明した。

「そんな事より、スパロウモン！！」

ディアナを安全地帯に連れていったディアナモンの合図をもらい、

「ディアナモン、スパロウモン、デジクロス！！」

タイキはこの戦いで使う最後のデジクロスを行った。

「ディアナモンDS！！」
ダブルイパー

銀の忍装束から、金に近い色合いの軽い鎧を身に着け、クレイモア風の双剣を帯びたディアナモンが現れた。

さらにハイビジョンモニタモンとルーチェモンも戦線に加わり、リリスモンと向かいあった。

「しかし容赦の無い布陣だねえ。でもまあいいか。」

リリスモンは構えを取って攻撃に備え、クロスハートとリリスモン

の機動六課を混ぜた因縁の対決が始まった。

最初に行動を起こしたのはルーチェモンだった。

「デバインフィート!!」

ルーチェモンは自身の魔力を開放し、仲間たちの移動力、攻撃力を高めた。

「アクセルシューター! シュート!」

「ハーケンセイバー!!」

すぐさま、なのはとフェイトが同時に得意技を放った。

「ふん、そんな技が効くわけ…」

しかしリリスモンは、普通が存在なら回避不可能、防御でもなお難しい攻撃を余裕で退けた。だがこれだけでは終わらない。

「フリード! プラストフレア!!」

キャロの指示を受けたフリードが、リリスモンに炎を浴びせた。不意を突かれ、リリスモンの動きが止まった一瞬のすきに、

「我が求めるは焰、機械の竜に炎の加護を。」

得意の強化魔法をメタルグレイモンにかけた。

「お願いします!」

キャロの合図とともに、

「メガフレーム!!」

メタルグレイモンは、口から鉄をも溶かす熱量を発する炎を大量に吐き出した。彼が普段戦う相手の場合、この一撃だけで終わるところだ。しかし相手はリリスモン、炎に包まれてもピンピンしていた。

「くそ! アイツは化け物かよ!!」

ヴィータは叫んだ、

「そりゃそうよ、でも本気の彼女はその化け物よりも恐ろしいよ。」

次に飛び出したのは、メデューサモンPNだった。

「スレイ・エリン！！」

メデューサモンPNは、どこから取り出した超巨大な剣をリリースモンに振り下ろした。しかし、リリースモンは剣を軽々と受け止め、メデューサモンPNを軽々とぶん投げた。

「雑魚が何人こようと結果は同じだよ。」

リリースモンがこう言った瞬間である、

「それはどうかな、だったら俺を捕まえてみな！！」

背後からシャウトモン×4Bの声が響いた。リリースモンは気が付くや否や攻撃を打ち込んだが、シャウトモン×4Bは一瞬で消えてしまった。

「残念だったな、俺はここだ。」

その後、現れたかと思うと消え、消えたと思うと現れを繰り返し、さながらモグラ叩き状態になった時。

「スターズブレイドセレストライク！！」

突如シャウトモン×4Bが、腰の二丁の銃を乱射しながらリリースモンに正面から突っ込んできた。普通に考えればどう考えても無謀な行いである。しかしシャウトモン×4Bは、リリースモンのナザルネイルが触れるか触れないか、ほんの一瞬の間にリリースモンの前から姿を消した。

「またか。」

リリースモンはこう呟いて周りを見回し、ハイビジョンモニタモンの姿を捉えた。

「そうか、これまでのシャウトモン×4Bはあいつの作った幻影。」

リリースモンがこう分析した瞬間、

「俺はここだ！！」

背後から本物のシャウトモン×4Bが現れた。

「何！？今度は本物？！」

リリースモンはうまく相手の動きに反応し、大振りに振られたスターソードを後ろに跳びながら受け、衝撃を和らげると同時に相手との

距離を取った。

「よし、最後は私!!」

距離を取ったリリースモンの前にディアナモンDSが現れた。大振りの双剣を二振りとも振り上げリリースモンを斬りつけようとする。リリースモンはナザルネイルを応戦しようとしたが、

「なんちゃって?」

突然ディアナモンは剣を降ろした。見ていた者は一様に驚いたが、その理由がすぐに分かった。彼女は自分の足に、スターソードが変形することで構成されるピクモンズのデジクロス・ピクワイヤー」を括りつけていたのだ。シャウトモン×4Bとメタルグレイモンが引くことで、ディアナモンはその場を離れ皆の元に戻っていた。

結果リリースモンの爪は空をかすめる結果に終わった。

「いくぞスバル! ヴィータ!」

「はい!!」

「応!!」

リリースモンの隙を突き、ピノッキモンRM、スバル、ヴィータが突っ込んできた。ピノッキモンRMとスバルは渾身のパンチで、ヴィータはハンマーでリリースモンを殴り飛ばした。

「今だみんな!!」

タイキが叫ぶと同時に、

「ディバインバスター!!」

なのはは得意の高威力砲撃魔法を、

「ギガデストロイヤー!!」

メタルグレイモンは背中の中翼と主砲からの破壊光線を、

「サンダーレイジ!!」

フェイトは自分のデヴァイスが発生させた雷を、

「バーストショット!!」

ピノッキモンは両手のリボルバーからの銃弾乱射を、

「フリード! プラストフレア!!」

キャラはフリードの吐き出す渾身の火炎を、

「ブリザードブラスター!!」

ディアナモンDSは周りを凍りつかせる振動を発する斬撃を、

「行きますヴィータさん! グランドクロス!!」

「応よ!!」

「「連技! 惑星直列!!」」

ルーチェモンとヴィータは、ルーチェモンの得意技「グランドクロス」を自身のハンマーで加速を付けて飛ばし、

「メデューサモン! ストラダを使って下さい!!」

「はい!! グングニル!!」

メデューサモンPNは、エリオから借りたストラダをグングニルに変形させて投げつけ、

「スバル殿! 行きますな、雷電閃!!」

「うん! デイバインバスター!!」

ハイビジョンモニターモンは自身の得意技「雷電閃」を、スバルのデイバインバスターに乗せて撃ち、

「x4Bフルファイア!!」

最後にシャウトモンx4Bが、頭部のバルカン砲、両腰の銃、カオスフレア、スリービクトライズの複合攻撃を放った。

皆の放った飛び道具は、全弾リリスモンの倒れているだろう場所に着弾した。普通ならばどんな存在であっても肉片一つ残らない、容赦ない殲滅砲撃だったが、肝心のリリスモンは立ち上がった。そして、

「傷?... 私の顔に傷を?...」

自身の顔に傷が付いた事を知ったリリスモンは、

「皆殺しい!!!!!!!!!!」

と叫んで、途轍もない殺気を放った。そして、足は両生類、体は昆虫、顔は獣の化け物へと変身した。特徴的なのは目と口で、目は顔中にびっしりと付いており、口は顔全体と同じくらい巨大だった。

「えええー！！！！」

「大きくなっちゃった?!?!」

「ってゆうか、姿自体変わってない。」

機動六課の面々は、突然のリリースモンの変化に驚いた。

「なるほど、あの時アイツも復活して、その時にあの姿になる事が出来るようになったのか。」

ベルゼブモンは冷静に相手を観察している。

「っていうか、何か生ゴミみたいな二オイが充満してないか。」

ピノッキモンRMは特徴的な長い鼻をつまみながら言った。因みにこの時、機動六課の隊舎の周囲二キロの範囲で、物を食べたり飲んだりした多くの人間が腹痛を訴えたとかないとか。

「生ゴミのような二オイはある意味摂取物に反応する猛毒ですね。」

普通に呼吸で吸う分には問題ありません。」

ディアナモンDSは、大きく息をしながら魔獣リリースモンの生ゴミ臭について分析した。

「っていうより、早くやつをなんとかしないと、六課の隊舎はおろか、クラナガン一体がメチャクチャになるぞ!!」

シャウトモン×4Bの一言で、クロスハート、機動六課の面々は再び攻撃の態勢に入った。

一方、肝心のリリースモンは、

「あらやだ、私ったらまたいつの間にか爆発してた?でもまあいいか、厄介な敵を始末できる事だし。」

と、魔獣化した肉体の中で考えていた。

そして、再び相手が自分に攻撃を加えようとしている所を見ると、
「ふうん、この姿になった私と戦おうというの？」

と考えて口を開いた。

機動六課、クロスハートの面々が再び先ほどの攻撃と同じ攻撃を放とうとした時である。魔獣リリスモンが口を開き、そこから黒い煙のような物が大量に出てきた。

「ぐえええ、臭え！！」

流れてきた気体のあまりの異臭に、皆は一樣に鼻をつまみ、拳句の果てには二オイが目染みて涙を流すものでも現れた。

「かすかに腐卵臭がしますから、恐らく硫黄の成分を含む気体かと。」

今にも意識が飛びそうになる悪臭の中で、ディアナモンは必至に分析を行った。

「そんな事より、これをなんとかしないと！！」

フェイトは息苦しそうにディアナモンに言った。

その時、

「硫黄の成分があるなら燃えるよね。」

フェイト、なのはは知らないが、他のメンバーが良く知る声が響いてきた。

「メガデス！！」

次に声が聞こえた時、機動六課勢のいた場所に巨大な爆風が発生した。爆風が収まってから、奇跡的に無事だった皆が空を見ると、黒を基調とした体に赤い翼をもつ巨大な竜「インペリアルドラモン」がいた。

「っておい！！あのガスを燃やすなら最初に何か言え！！！！」

ヴィータが空に向けて叫んだ時、インペリアルドラモンの背中から二つの影が降りてきた。

一つは、黒い甲冑のような装備を身に着け、両手に剣を携えた武人のような姿の竜。二つ目は、その竜の背中を持つている、全身を青い鎧で固め、背中に金色の翼を十枚持つ天使のような姿をしていた。二人が地上に降りると、真っ先にタイキの元に行き、

「君が工藤タイキ殿だね。」

と、青い鎧を身に着けた天使が言った。

「私の名はセラフィモン、そして彼はガイオウモンだ。訳があつて理由は語れないが、君たちに加勢しよう。」

「うおおおお！！ぞんぶんに暴れてやるぜ！！！！」

セラフィモンの言葉に続いて、剣を振り上げながらガイオウモンは叫んだ。

「んな！前は敵として出てきた奴の仲間をこの場だけ信じろって言うのかよ！」

彼らの言葉に、ヴィータは敵意を丸出しにして言った。それに対し、二人は静かに頷いただけだった。

「分かった、よろしく頼む。」

タイキは少し考えたが、二人に言った。

「っておい！！」

ヴィータはタイキの判断に面食らったが、

「そりゃ確かに、今は足に手は代えられない状態だけど。」
と、言った。

（いや、それを言うなら、背に腹は代えられない、だろ）

今この場にいる皆、クロスハートや機動六課の面々はもちろん、リスモンやセラフィモン達もこう思った。

「！！ともかく、奴に対抗するため、まずシャウトモンを×4の状態にして、私たちとメデューサモン、ディアナモンをデジクロスさせてくれ。」

セラフィモンに気を取り直して作戦の説明を受けたので、

「クロスオープン！シャウトモン×4B！！」

言われた通り、シャウトモン×4Bを×4にして。

「シャウトモン×4、メデューサモンPN、ディアナモンDS、セラフィモン、ガイオウモン、デジクロス！！」

と叫んだ。

クロスローダの光の中から現れたのは、シャウトモン×5の翼の無いボディに純白の白い翼が六枚装備され、手にはガイオウモンの剣を取り込んだ形状に変化したスターソードを持った合成型デジモンが現れた。

ジャッジメントモード

「シャウトモン×5JM！！」

シャウトモン×5JMは飛び立つと、魔獣リリスモンに向かっていった。

「ふん、何がデジクロスしようと無駄だよ！！ダストプロミネンス！！」

魔獣リリスモンは、迎撃のためにとても臭い炎を吐き出した。しかし、

「エクセリオンバスター！！」

「バーストショット！！」

「ギガデストロイヤー！！」

なのは、ピノッキモンRM、メタルグレイモンの攻撃で阻止された。行くぜ、アロー・オブ・セブンズフィール！！」

至近距離でシャウトモン×5JMは、スターソードを弓の形状に変化させ、特殊な形状の矢を七本発射した。

飛んで行った矢は全発リリスモンに命中し、当たった個所が氷始めたり燃え始めたり、乾燥し始めたりした。

「なるほど、七つの星の特徴的な環境を命中した時に発生させる矢か。」

インペリアルドラモンの背中の上にいる、竜のマスクを被った少年はこう分析した。見ている間にも、どんどん戦況は変化していった。

「これでとどめだ！ガイアリアクター・デッドエンド！！」

シャウトモン×5JMは、天まで届くんじゃないかと思えるほどの巨大な炎を発生させた剣を振り上げ、リリスモンの体を真つ二つに斬った。

「くっ！ま、まさか！！」

リリスモンは思いもしなかった結果に驚き、何故だあ！！、と叫びながら消えていった。

「うーん、やはり素晴らしい。」

ミッドチルダのとある場所にて、リリスモンのやられる場面を見ながら男は言った。

「でも勿体ないですねえ。結構強い戦力だったんですが。」

隣で同じようにモニタを眺めながら、白いコートを羽織った女が言った。

「あのまま”彼ら”を介入させずに済ませば、厄介な連中を一網打尽にできたのに。」

しかし男は、

「そうはいかない、彼らはこれから始める劇の大事な役者だからね。」

と、モニタを眺めながら言った。

「はあ、なんとか撃退できたな。」

セラフィモン、ガイオウモンがインペリアルドラモンと一緒に去っていくところを見届けながらタイキは言った。

「またあんな奴が攻めてきたらどうなることか。」

エリオもフラフラの状態であった。

「でもそれより気になるのが、あいつだよ。」

ドルルモンはこう言って、ある方向を見た。そこには、先ほどからずっと気を失ったままの状態のティアナが言った。

第七話 リリスモンVS機動六課& a m p・クロスハート（後書き）

カットマン

「カットマンと！」

モニタモンズ

「モニタモンズの！」

全員

「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン

「今回のテーマはベルゼブモン。ベルゼブモンはベレンヘーナという銃を装備している魔王型デジモン、必殺技は相手の願いをかなえる代償に相手の自由を奪う「ダークネスクロウ」神速とも言われるスピードでベレンヘーナを撃つ「デス・ザ・キャノン」だ。」

モニタモンA

「多くを語らず誰にも群れない孤高のデジモンですな。」

モニタモンB

「友達はいるのかな。」

カットマン

「まあ、友達はいなくても、いつでも動ける部下はいるんじゃないか。仮にも魔”王”なんだし。」

モニタモンC

「今度調べてみよう。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

ひたすらに強くなりたいと望むティアナ。その姿にかつての自分や、その後の好敵手の影を重ねたなのは、タイキ、ドルルモンは、ティアナに自分の経験を語って聞かせる。

次回「強さとは、仲間とは」

第八話 強さとは、仲間とは

ティアナが目覚めたのは、リリスモンによる機動六課襲撃からしばらく立ってからだった。

「あ、起きたっキュ。」

ティアナの傍にいたキュートモンは、シャルを連れて戻ってきた。「キュートモンの治療術はとても優秀だから体にダメージは無いと思うけど、痛いところとかはある？」

シャルはティアナに着替えを渡しながら言った。

ティアナは着替えを受け取った後、ふと時計を見て驚いた。午後八時をとくにこえているのだ。外を見ると、日は落ちて暗くなっている。

「きつと疲れがたまってたんだっキュ、電源を切ったみたいに静かに寝てたっキュ。」

キュートモンは、的確とも微妙ともいえる比喻を言った。

一方、かつてデジタルワールドで行っていた死闘当然の激しい戦いを終えたタイキは、隊舎の屋上で空を見ていた。

「浮かない顔ですね。そんなに心配な事でも？」

すると、メデューサモンが話しかけてきた。

「ああメデューサモン。リリスモンについて考えていたんだ。」

タイキはこう答え、

「今回はリリスモンだったし、途中で援軍が来たからよかったけど。もしこれがタクティモンやダークナイトモン、デスジェネラルのよくな実力者だったらどうなっていたことか。」

と言った。つまりは、リリスモンが蘇り、こうして自分たちを襲撃

したとなると、自分たちがかつて相手した実力派デジモン達と、再び干戈をまじえる事になるのだらうと。この事を危惧しているのだ。「大丈夫ですよ。そんな奴らを相手にしてきて、結局最後は私たちが勝つてるではありませんか。一度勝ったのならまた勝てます。」メデューサモンは先ほどの戦いの疲れを感じさせない元気な口調で言った。その後、

「でも、今最も気になるのはそれじゃ無いんでしょう。」

口調を変えてタイキに言った。

「ああ、ティアナの事なんだ。なんだか似てるんだ、お前の前の主人に。」

タイキがメデューサモンにこう言った途端。隊舎のあちこちに警報が鳴り響いた。

「一体なにがあったんだ。」

「困りましたね、みんな先ほど決死の死闘を繰り広げたというのに。」

しばらくすると、ヴァイスが駆け足で屋上にやってきた。タイキが何かあったのかと訊ねると、

「ここの近くの海の上で何十機かのガジェットが現れたんすよ。まあここに居ればいずれみんなやって来ますよ。」

ヴァイスはいそいそとヘリコプターに乗り込みながら言った。

しばらくして、なのは達隊長陣とスバル達フォワード隊もやって来た。新人たちの中にはティアナもいた。

「とりあえず今回は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長で出動するから。みんなはシグナム副隊長と待機していて。」

部隊長との作戦相談で決まった事を簡潔に伝えたなのは、ティアナを見ると、

「今日はティアナは出勤から外れておこうか？」

と言った。

「そうだな、あの喧噪の中で今の今まで眠り続けられたんだ。今日は万全じゃないだろ。」

ヴィータは、昼間のリリスモンとの激闘の最中、ティアナはずっと起きることが無かった事を思い出して言った。

一方のティアナは、握っていた拳をワナワナ震わせながら。

「言う事聞かないうえに、簡単に敵に操られるような奴は、使えな
いって事ですか。」

と言った。

「自分で言いながら分からない？ まったくその通りだよ。」

なのはがこう言うと、

「訓練はちゃんと受けてますし、現場の命令だってちゃんと聞いて
ます！！それでも強くなる努力はしやいけないんですか！！」

ティアナはなのはに言った。この様子を見ているメデューサモンに
しては、どちらかと言えば不愉快な後継だった。

（まったくあいつと同じだ）

こう思った瞬間、メデューサモンはティアナの前に出て、彼女の頬
を思いつきり引つ叩いていた。普通の人間が行ったのなら、普通に
驚く程度ですんだ一撃だったが、デジモンの力で叩いた為、ティ
アナの体は遠くのフェンスの近くまで飛んで行った。そして無意識の
うちに、

「子供かあんたは！！少し自分の思い通りにならない程度でギ
ャー騒ぎやがって！！そんなに気に入らないきゃ出ていきなさい
よー！！」

と、ティアナを怒鳴りつけていた。

「……………」

初めて見たメデューサモンの本気の怒声に、機動六課の面々は勿論
の事、何よりクロスハートの面々が驚いた。
しかし、そうしていても仕方ないので。

「ティアナ、何か塞ぎ込んでるみたいだけど、戻ったらゆっくり話そう!」

三人の隊長は出勤することにした。なのはは必至にティアナに伝えようとしていたが、

「早く行こうぜ、メデューサモンに怒鳴られるぞ!」

ヴィータに引つ張られてしぶしぶ現場に向かつていった。

その様子を見届けてから、

「……まあ、なんだ、とりあえずロビーに戻るぞ。」

気を取り直したようにシグナムが皆に言った。

「それよりティアナは……無事みたいだな。」

ティアナのふっ飛ばされた方向を見て、ドルルモンは言った。

「まったく、あの子は”アイツ”より少しは利口だと思ったけど。」

メデューサモンがこう言うと、

「メデューサモン、確かに命令を聞くのは大事だし勝手な行動もよくない事を分かってる。でも、強くなりたいならそれ相応の努力をしてもいいと思います!!」

スバルがメデューサモンにこう言った。

「そうね、あなたのいう事に間違えは無い。でも断言してあげる。

あの子、今のままじゃどう努力したって強くはならない。」

と、メデューサモンは言い放った。

「ティアナには強くなる要素が欠けている。っていう事だろ。」

メデューサモンにタイキが言った。そして、参考にしてもらうため、かつての自分のライバルについて話した。

青沼キリハ、彼はデジタルワールドに名を轟かせた通称「青の軍」ブルーフレアのジェネラルである。グレイモンを始めとする強力な竜型デジモンを数多く揃え、その力はタイキ達「クロスハート」は勿論、バグラ軍にも匹敵すると言われた勇壮な軍を率いていた。

ある日、キャニオンランドと呼ばれる場所をバグラ軍の魔の手から解放しようとした時の事である。あと一歩の所まで敵のボスを追い

詰めたキリハだったが、敵の策略により敵に捕まり、その後共に戦っていたタイキ達と離反し彼らに敵意を示した。

しかし、そんな中での仲間の説得、中でも「デッカードラモン」の決死の説得により、本当に強い者は強い仲間を持つ、という事実に気づくことが出来たことを。

「それじゃあ、本当に強い奴が強い仲間を持つ理由はわかる？」

タイキが話し終えたタイミングを見計らって、メデューサモンは皆に訊いた。声色も普段通りに戻っている。

「……………」

皆は考え込んでいた。

「正解はね、言葉通りの意味で強い者は存在しないからよ。」
メデューサモンは皆に言った。

「たとえどんなに強力な戦士でも、必ず何か弱点があるものなの。その弱点を補える者がいることで初めて文字通り強力な戦士になれるの。本当に必要なのは強力な力ではなく、皆と協力すること。」

それを聞きながらシグナムは思った。何の共通点の無い烏合の衆と言っても過言ではないタイキ達が精強な軍として戦える理由はそこにあったのかと、

一方、なのは、フェイト、ヴィータがガジェットと交戦している海上のすぐ近くには、前にホテル・アグスタにやって来た黒いローブの少女、ルーテシアがいた。

「ごきげんよう、ルーテシア。」

するとモニタが開いて、ホテル・アグスタの時にもルーテシアに話を持ってきた男の顔が映し出された。

「ごきげんよう、ドクター。向ここの海でドクターの玩具が飛んでるけど何かあったの？」

と、ルーテシアに訊ねられると、

「残念ながら今日はレリックは関係ないんだ。これから花火が見れることになるからね。」

ドクターと呼ばれた男はこう答えた。そして、

「そうだ、近くに”彼”がいたら、今後は勝手な行動は極力慎んでくれ、と叱っておいてくれないか。」

と、ルーテシアに頼んだ。

「うん、いいよドクター。」

ルーテシアは二つ返事で了承し、モニタを閉じた。

「なにやら海が騒がしいけど、何かあったの。」

すると、ルーテシアの背後に龍を模ったマスクを被った少年が現れた。普通なら不審者扱いされるが、ルーテシアは彼の事を知っているらしく。

「ドクターが、勝手な行動は極力慎んでくれ、と叱っておいてくれたって。」

と言った。

「そうなんだ、それじゃあ甘んじて叱られようかな。」

少年はそう言いながらルーテシアの立っている防波堤の上に腰かけた。

一方、機動六課の隊舎では、ティアナは海を眺めながら考えていた。結局私は兄の汚名を雪いで何をしたいのか、と、

「どうした考え事か？」

ドルルモンが話しかけてきた。

「うん、兄さんの汚名を雪いだ後何をしようかな、って。」

ティアナはこう言うと、

「そういえば、ドルルモンは何をきっかけにタイキ達の仲間になったの？」

しばらく前から気になっていた事を訊いてみた。以前も聞いたがはいまいにしか答えてくれなかったのだ。

「そうだな、あれは……」

ドルルモンは昔を思い出しながら語り始めた、

かつて自分は、先祖代々戦士の一族の元に生を受けた。そこで、常日頃から技を磨き、体を鍛えながら過ごしていた。その時、いつもこう考えた、

なんで自分たちは強くなるんだろう、と、

ある時、里を飛び出した彼は、当時デジタルワールドに覇を唱えようとしていたバグラ軍に入り、所属している三元士の中でも最強と謳われた「タクティモン」の部隊に入った。

そこで彼は一族の元で培った技を使って様々な戦場で大活躍し、あつという間にタクティモンの片腕とまで言われるようになり、「死神の風」の名で恐れられるようになった。

しかしある戦場で、彼は若い兵士で構成された部隊の指揮をして戦っていた時、突然タクティモンに本陣まで呼び出され、本陣についた途端、40体ものタンクモンが一斉に戦場に対して砲撃を開始し、自分の指揮していた部隊もろとも敵の主力部隊を殲滅した。

作戦的には何も間違えは無かったはずなのだが、なぜか彼には認められない結果になった。

そして後日、違う戦場で同じように犠牲になることになった部隊を独断で脱出させ、次いで自分も行方をくらました。

その後、親を探して旅をしていたキュートモンと出会い、彼と一緒に行動しているうちにタイキ達と出会ったのだ。

「實際一族の連中は分かっていたのさ。何かを犠牲にして得た強さは、敵を倒せても何かを守ることはできないと。滑稽な話だろ、俺は誇らしげに戦いながら、結局は戦うごとに一族の誇りに泥を塗っていたんだ。」

ドルルモンは、自分の思い出話を聞いているティアナに、

「なのはが戻ってきたらしっかり話をしておくんだ。あいつの思いを聞いてみる。」

と言ってその場を後にした。

しばらくして、出勤より戻ってきたなのはが現れた。

「あ、なのはさん。」

ティアナが気づくと同時に、なのはは彼女の横に座った。

「浮かない顔だけど、私がない間にしっかり絞られた？」

と、なのはに訊かれたティアナは、

「はい、みんないろいろな経験を経て強くなっていったんだと。」

と、答えた。

「そう、じゃあ私の話も聞いてみる？」

なのははこう言って、かつての自分について語り始めた。

かつての自分は、魔法を知らないのは勿論の事、そもそも戦う事自体ありえない普通の子供だった。それでも、ある時助けたフェレットと、自分が普通より魔力が強かった、それがきっかけで魔法と出会い、プレシア事件、闇の書事件と、多くの実戦を繰り返した。これまでにある時、仲間たちと共にアンノウンの対応に出動した際、これまでの苦勞がたたり一瞬の判断ミスで大怪我をした。一時は魔道士として活動するのはおろか、普通の人間として生活することもできなく

なると言われたが、無茶なりハビリで今の状態まで回復し、こうして現役として活動している事を。

「私の場合、一時”死にぞこない”って言われるくらいしづとかったから良かったけど、みんなが私と同じようにできる訳じゃないでしょう。みんなの長所を殺さずどんな状況にも対応できるようにしたかったんだけど。私の教導地味でしょう。まるで進展があるようにじつれたかったんだよね。」

一通り話したなのは、最後にティアナにこう言った。

「明日くらいからティアナが執務官になれるように、個人戦のやり方も教えてあげるから。」

この後、ティアナが号泣する等、少し問題はあったが機動六課の面々はより強い繋がりを持つようになった。

しかし、この時は誰も知らなかった。これから第一世界ミッドチルダはるか、次元世界すべてが危機に陥る一大事件が起ころうとしていた事を。

第八話 強さとは、仲間とは（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー!!!」

カットマン

「今回のテーマは、この小説のチームクロスハートオリジナル構成員ディアナモン。因みにイメージCDVは、魔法少女リリカルなのはシリーズでのフェイト役で有名な水樹奈々さんだ。」

モニタモンA

「ディアナモンは、ニンテンドーDS専用ゲーム「デジモンストーリー・ムーンライト」で初登場した神人型デジモン。得意技は背中 of 突起物を矢に変えて飛ばす「アロー・オブ・アルテミス」両足の「グッドナイトシスターズ」から月の光を放ち、浴びた相手を眠らせる「グッドナイトムーン」相手に幻覚を見せ、敵と判断すると即時斬り伏せる「クレセントハーケン」ですな。」

モニタモンB

「光と影を司る月のように、優しくも厳しい、美しくも恐ろしいデジモンですな。」

モニタモンC

「しかも絶対零度の中でも行動できますな。」

カットマン

「因みに、普段は仮面で顔を隠しているけど、素顔は輝く銀髪と美麗な顔立ちの美人らしいぞ。」

モニタモンス

「重要なようでどうでもいいですな。」

全員

「それじゃあまたね!!」

次回予告

ある日、機動六課の新人たちに一日休みが言い渡された。タイキ達も同様で、スポーツチームの助っ人としてミッドを回ることにした。そんな中で事件の歯車が動き出す。そして、あのキャラクターが特別出演

次回「機動六課のとある休日、前編」

第九話 機動六課のとある休日、前偏

朝も早い時間ではあるが、機動六課隊舎の演習場は喧噪で包まれていた。なのは達教官組が、スバル達新人組を鍛えているのだ。

最後の訓練が終わってから、

「さて、みんなの今の実力だけど。二人はどう思う？」

新人四人の前で、なのははフェイトとヴィータに訊いた。

「私は合格だと思うな。」

フェイトは即答し、

「まあ、あれだけやってるんだ。これくらいは出来てもらわねえと。」

少し考えてからヴィータも答えた、

新人四人には何のことかよく分からない、

「これからはみんなのデヴァイスのリミッターを一つ外して、もつと上の訓練をしようと思うんだ。」

と、なのはが皆に告げ、

「とりあえず、次の訓練は明日からな。」

と、ヴィータが言った。

「え？明日からって？」

新人四人が訊くと、

「最近は毎日訓練漬けで、ましてこの前はリリスモンに襲撃されて大騒ぎだったでしょう。だから隊長たちと相談して、今日一日はお休みにしようって事になったの。」

と、フェイトが説明し、

「だからみんなは今日一日、町に出てくるといいよ。」
と告げた。

新人たちは皆大喜びである。それもそうである、どんなにその競技や分野の練習をするのが好きな人でも、休みを喜ばない者はいない。
「所でさ、タイキ知らねえ？」

突然、ヴィータがその場にいる皆に訊いた。

「今日だけじゃなくて、この間もいなかった。何かあったのか？」
タイキは今日ばかりではなく、以前にも訓練にいなかった事があるのだ。

「あ、ええと、出勤中です。」

スバルは言いにくそうに言った。

「出勤中って、事件は何も起きていないのに。」
と、フェイトが言うのと、

「ああ、事件じゃなくて、スポーツの助っ人です。」
と、ティアナが付け足した。

そして、そのタイキがどこで何をしていたかと言うと、

ミッドチルダの首都、クラナガンにある中規模な運動場。ここでは、腕と足にサポーターを付け、ヘルメットを被った選手が、楕円型のボールを小脇に抱え走り回っている。いわゆる「ラグビー」が行われているのだ。

その中でも、特に助っ人として参加しているタイキの活躍は目覚ましかった。

「おい！七番に三人つける！奴を止めれば流れは変わる！！」

タイキのチームの相手チーム選手の一人が叫んだ。タイキは七番の背番号を付けて試合に出ており、今まさにボールを小脇に抱えゴールの近くまで来ているのだ。

タイキは、自分が囲まれる直前に、

「ルーク！頼むぞ！！」

と言って、同じチームの選手のルーク少年にボールを渡した。

「よし！ナイス！！」

ボールを受け取ったルークは、そのままゴールに突っ込みトライした。これでチームに点が入り、その瞬間、

「試合終了！！」

ホイッスルの音と共に、審判の声がグラウンドに響き渡り、タイキ達のチームの勝利が決まった。

「ありがとうタイキ、あのタイミングで俺にパスしてくれて。」

最後のトライを決めたルークは、涙ながらに礼を言った。

「ルークがいつもトライの練習してること知ってたから。」

タイキはルークにこう言った。

「なあ、せっかくだし正式にうちのチームに入らないか？」

喜びの中で、選手の一人がタイキに訊いた。

「タイキ、マジで才能あるよ。試合中ずつと走り回れる持久力はさることながら、あんなに相手に囲まれて周りが見えてるなんて。」

他の選手も、この試合でのタイキのプレイを振り返り、それを称賛しながら言った。

「悪い、その話はまた今度な。」

しかしタイキは、即答ともいえるタイミングで答えを出した。

選手が、なんで、と訊いている中で、

「彼はこれからバレー部の助っ人に行くんですよ。」

美の神、芸術の神、そして造形の神が一堂に会し、何日もの試行錯誤を繰り返して至った結論のように、美麗な容姿の女性が言った。

髪の色は銀なのだが、老けた感じはまるでなく、大人びた感じを醸し出している。男も女も見とれるようなこの美女は、肩からスポーツバッグを提げているのでタイキの助手か何かなのだろう。

「はい私特性のエネルギー飲料。おにぎりも作っておきましたから向かう途中で食べて下さい。」

すぐさま次の会場へ向けて走り出したタイキに、彼女は水筒を渡し、会場への道順を説明したり、次の試合で使うユニフォームを渡したりと甲斐甲斐しく働いている。

ちなみに彼女は、戦闘用の装備をはずし現代風の服装をしたディアナモンであり、特に謎ではない。

「魔法の技術の進歩と進化はすばらしいものである。しかし、それゆえに我々を襲う危機や災害も十年前とはくらべものにならない程危険度をましている。」

演台では厳つい顔をした、いかにも武闘派と言える男が演説を行っている。その様子を、放送されているニュース番組の中で見ているルーチェモンは、

「何なんですか？このシャウトモンに引けを取らない暑苦しい演説をするおじさんは？」

新鮮な野菜がたっぷり入った鱈子スパゲッティを口に運びながら、隣のテーブルについているなのは達に訊いた。ちなみに彼のテーブルには、ワイズモン、ドンドコモン、チビカメモン、ジジモン、スパードモンが付いている。

「ああ、時空管理局地上本部総司令のレジアス・ゲイズ中将だよ。」と、フェイトが説明すると、

「このおっさん、まだこんな事言ってるよ。」

「レジアス中将は昔から武闘派だからな。」

演説を聞いたヴィータは呆れ、シグナムはルーチェモン達に補足説明をした。

「俗に言う”頑固者”カメ？」

チビカメモンが同じ席についている面々に訊くと、

「それはともかく、隅の方の席にいる三人は何者ぞい。」

ジジモンが自分の杖で、レジアスの隣にいる三人の老人をさした。

「右から、ミゼット提督、キール元帥、フィリス相談役や。管理局

を創設以来支え続けている人なんよ。」

はやてがジジモンに説明した、

「これがいわゆる”大御所”カメ？」

再びチビカメモンは同じ席にいる面々に訊ねた、

「……………」

ワイズモンは画面を見ながら考え込んでいる。フードで顔は隠れているので表情はうかがえないが、きっと難しい顔をしているのだろう。

「どうしたの？ワイズモン？」

と、スパードモンが訊くと、

「いや、あの男の事がとても気になるんだ。」

と、ワイズモンは答えた。

「怪しいとかそんな感じですか？」

ルーチェモンが訊くと、

「そんな感じではないんだ。ただ我々はあの男に振り回されそうで、

」

と、ワイズモンは言った。すると、

「振り回されそうなんやなくて、実際に振り回されるで。」

と、はやてに言われた。はやてが言うには、レジアスは自分たち機動六課を目の敵にしているのだという。

「なんとしてもタイキ君の事が公になりすぎないようにしないと。それがばれたら大目玉になるからな。」

はやては最後にこう言った、

そして、スバルとティアナが町を回って買い食いをしたり。エリオ

とキャロが海辺の道を散歩している時に、タイキが何をしていたかと言うと、

クラナガンにある中規模な体育館にて、タイキはバレーの試合に参加していた。

高くジャンプし相手のボールを止め、トスでボールを高く上げ相手のコートへボールを入れようとする。そのうちにタイキの放ったスマッシュが相手のコートに入り、その瞬間試合終了のホイッスルが鳴り響いてタイキのチームの勝利が決まった。

試合終了後、タイキ達は近くの河原でぶっ倒れていた。午前中だけで二試合を一度にこなしたので、当然と言えば当然である。

「よし、二つとも勝てた。」

「はあ、ラグビーもバレーも初心者なのに、一気に二試合助っ人なんて普通ならやりませんよ。」

ぶっ倒れるタイキに、ディアナモンが言った。タイキはこの世界にきてからも、時折元の世界にいた時と同じようにスポーツの助っ人を行っている。そしてここではディアナモンが、かつての陽ノ元アカリのように彼のマネジメントをしているのだ。

「でもさ、ラグビー部のルークは今度違う次元世界に引越すから今回がこのチームでの最後の試合だったんだ。バレー部のケビンも折角仕事で忙しい両親が見に来てくれる試合だったのに、メンバーのけがで人数が足りなくなっちゃって。」

そして彼は、涙ながらに頼みに来た二人の姿を思い出しながら言った。

「だから、ほつとけなくて。」

「アカリさんの苦勞が良く分かりましたよ。いつもこれでは我々の体力が持ちませんよ。」

タイキにディアナモンはこう言って、

「この後は何もありませんし、先ほど今日一日休みだという連絡が入りました。貰った給金使ってみんなで何か食べに行きませんか？」と、言った。ちなみにみんなとは、チームクロスハートのメンバー

の事である。

なので機動六課隊舎に戻り、皆を連れて町に出るため、タイキが立ち上がるうとすると、

「いた！ようやく見つけました！工藤タイキ！！」

薄緑色の髪の毛、両目の虹彩の色が違う少女に声をかけられた。

「えっと？誰だっけ？どっかで見たような？」

タイキは突然の事に驚き、自分の記憶を必至に整理した。

「ほら、この間でなくてもいいと言われたストライクアーツの個人組手の大会でタイキに負けた娘。」

ディアナモンは少しだけ覚えていたらしく、タイキにこう言った。ちなみに、以前怪我のため出られなくなった選手の変わりにストライクアーツの大会で、団体組手部門だけでなく、本人からでなくてもいいと言われていた個人組手部門にも律儀に出場し、決勝戦で彼女に勝利したのだ。

「名前なんでしたっけ？」

とディアナモンに訊かれたタイキは必至に記憶の中を搜索し、

「確か：パインアップルとかなんとか…」

苦し紛れに浮かんだ単語を言った。そしたら、

「アインハルトです！アインハルト・ストラトス！！」

少女は自分の名を名乗り、

「工藤タイキ、あなたに仕合を申し込みます！！」

と、単刀直入に言った。

「これまで戦った相手の中で、唯一あなたが霸王流を打ち負かしたんです。今こそあの時の雪辱を……」

「いや、あれはまぐれで。普通にやって俺が君に勝てる訳ないって。」

「意気込みに燃えるアインハルトにタイキがこう言つと、」

「まぐれでもなんでも、あの時私に必殺の一撃を打ち込んだあなたの目は真正正銘のグラップラーでした。」

「あのですね、タイキは今日午前の間だけで二試合をこなしてるん

です。たかが格闘技やってる暇はないんです。」

アインハルトとディアナモンの間で言い合いが始まってしまった。

「たかがとはなんですか？これは格闘家の誇りとプライドをかけた

……」

「何が誇りとプライドですか？っていうか同じです二つとも。」

その陰でタイキは、

（クラナ川の流れは今日も穏やかだ）

と思っていた。

するとそこへ、エリオとキャロから連絡が入った。路地裏で小さな女の子がレリックのケースを持って倒れているとの事だ。

「ディアナモン！」

タイキがディアナモンに呼びかけると、

「はい！！」

ディアナモンは素早く荷物を取り、現場へ向けて走って行った。

「え？あの、ちょっと？！」

いきなりの事にアインハルトが驚いているうちに、

「ごめん、また今度な。」

タイキはこう言い残して去って行った。

「あ、待って下さい、話はまだ……」

しかし、アインハルトの声は彼に届かなかった。

「もう。」

仕方がないのでアインハルトはいったん家に帰ることにした。この時はまだ想像もしていなかっただろう、これから二人である事件に立ち向かう事を。

第九話 機動六課のとある休日、前編（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー!!」

カットマン

「さて、今回のテーマはデジモンだ。」

モニタモンA

「デジモンはエンシエント型デジモン。デジタルワールドが創生された時から存在するといわれるもっとも古いデジモンの一体ですな。」

「

モニタモンB

「とても物知りで、なおかつ大樹のように老練な力を持つデジモンでもありますな。」

モニタモンC

「見た目はよぼよぼだけどね。」

カットマン

「デジモンはクロスウォーズを始めとしていろいろな作品に登場しているけど、ただ一つ共通しているのは長老として主人公たちの前

に現れる事だな。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

一人の少女を保護した機動六課の面々は、レリックを求めて地下へと赴く。そして、レリックを探す謎の黒い少女と出会う。

次回「機動六課のとある休日、中編」

五話更新記念の回、その二（前書き）

二回目の五話更新記念の回です。

あとがきが本文より長くなってしまった。

五話更新記念の回、その二

ここは、とある管理外世界のとある場所

カタカタカタ

ここでは一人の男がパソコンを使用し文章を打ち込んでいた。彼は言わずと知れた（少しくらいは名が売れただろう）この小説の作者「超人カットマン」である。

超人カットマン

「さて、再び五話更新したぞ。」

という事で彼はいったん一服しようとした、すると、

???

「それならこのまま一気に最終話まですべて更新してはどうだ？」

背後から声が響いた

超人カットマン

「?????」

超人カットマンが振り向くと、背後には全体的に黒い服を着た茶髪の、幼いころの「高町なのは」に似た少女が立っていた。

超人カットマン

「って！お前は星光シュテル・ザ・デストラクターの殲滅者じゃねえか！！」

現れたのは、PSP専用ゲーム「魔法少女リリカルなのはA's
THE BATTLE OF ACES」に登場するキャラクター
の一人「^{シュテル・ザ・デストラクター}星光の殲滅者」だった。

シュテル

「それに私だけではない」

シュテルがこう言うと、幼い頃のフェイトにそっくりだが髪の色が
違う少女、幼いころのはやてにそっくりだが態度がデカそうな少女
が現れた。

はやて似の少女

「デカいのは夢と宝の詰まった女の象徴だけで十分よ。」

この台詞の意味と意義は不明だが、

超人カットマン

^{レヴィ・ザ・スラッシャー}
「今度は、雷刃の襲撃者に閻統べる王かい。」
^{ロード・ディアーチェ}

シュテル

「出てきたものに呆れている場合ではない。第一回目で募集した質
問が一つきているんだ。待たせた分しっかり答えなさい。」

シュテルはこう言って、どこから取り出した葉書を読みだした、

シュテル

「支配者、なる人物からの質問です。第四話に登場したシャウトモ
ン×3GMの使用した技「ブリリアンスダガー」「ブレスオブペル
ーン」がオリジナルな技かどうか聞きたいんだそうだ。」

ロード

「我に黙って支配者を名乗るだと、こやつ。」

レヴィ

「そこ関係ないよ。」

超人カットマン

「とりあえず回答するぞ。元々シャウトモン×3GMは、ニンテンドーDS用ソフト「デジモンストーリー 超クロスウォーズ」のブルード版、データカードダス「デジモンクロスウォーズ 超デジ力対戦」に登場した、シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、グレイモン、メールバードラモンがデジクロスした時の姿だ。そして質問にある二つの技は超クロスウォーズの中に登場する技で、それぞれシャウトモン×3GMがLV45でブリリアンスダガー、LV82でブレスオブペルーンを覚えるんだ。」

シュテル

「さて、これで今回のノルマは達成しましたね。」

レヴィ ロード

「早?!?!?!」

超人カットマン

「しょうがないだろ、質問はこの一つだけなんだから。人気ランキングの途中経過をするにも全然票が入ってないし。」

ロード

「おぬしの才能が無いだけであろつ。自由に感想をかけるようにしているのにこの体たらくでは。」

超人カットマン

「まあとにかく、今言った通り感想は自由に書けるようになってい
る。一見さんも十見さんも気軽に感想を書いてくれるとありがたい
です。」

とりあえず今回はこれで終わりだ。」

シュテル レヴィ ロード

「早すぎだあ……!」

史上最短を更新した二回目であった

五話更新記念の回、その二（後書き）

???

「おはらっきー！ナビゲーターの小神あきらですーすー！」

???

「初めまして、白石みのです。」

あきら

「さあ、今回のらっきーチャンネルにはゲストをお呼びしました。超人カットマンさんです。」

「……………」

あきら

「あれれ？カットマンさんが出てきません。」

カットマン

「ちよつとまてえー！」

みのも

「ちよつとカットマンさん。出てくるときはもっと穏やかに。」

カットマン

「知るか！と言うかお前らは何をやっているの？！ここはデジモン紹介のコーナーであって、らっきーチャンネルの場じゃねえ。」

あきら

「今回は特例と言う事で、番組同士を共演させようという事になっ

たんですよ。」

カットマン

「ああ、そうなの。」

みのも

「そういう訳なんです。」

あきら

「そういえば作者さんは、らきすた、のアニメを全話完見たんですよ。」

カットマン

「まあ、一応。」

あきら

「カットマンさんは、あきらの事をどう思います?」

カットマン

「はい?????」

みのも

「ですから、あきら様はカットマンさんに自分の事を聞きたいんですよ。」

カットマン

「そうだな、たった五分くらいの出番であれだけのインパクトを残せるんだから凄いと。」

あきら

「ふうーん、たった五分ねえ。」

カットマン

（あれえ？）

みる

（ヤバイ、あきら様が不機嫌になってる）

みる

「いや、でも一話のメインキャラとして出ても名前を覚えてもらえない地味なキャラもいるんですから。」

カットマン「そうですよ。長々地味にいくなら瞬間的に派手にいきましょう。」

あきら

「そうですね。私目から鱗が落ちました。」

みる

「あきら様、目から鱗が落ちる、ってどういう意味か分かってます？」

カットマン

「分かってなきゃ言わないと思うぞ。」

あきら

「あれれ、もうお別れの時間？今回は超人カットマンさんをゲストにお送りしました。それじゃバイニー。」

カットマン

「バイニー？」

みる

「バイニー。」

幕が下りてから

あきら

「んで、肝心のデジモンの事聞けなかったけど。」

カットマン

「いやいや、あんたが最初に自分についての話をしたからでしょう。」

「

あきら

「あれあれえ、それじゃあ私が悪いって言うのぉ？」

みる

「あきら様、その辺で。」

あきら

「まあいいわ、とりあえずちゃっちゃんと説明して。」

カットマン

（なんかムカつく）

カットマン

「今回のテーマはインペリアルドラモン。インペリアルドラモンは古代デジタルワールドに存在していたと言われる古代竜型デジモン。必殺技は高威力レーザーを発射する「ポジトロンレーザー」暗黒物

質を含む火炎を吐き出す「メガデス」だ。」

あきら

「それだけ？」

みのる

「ええと、力が強すぎるため、環境によっては善の存在にも悪の存在にもなるとあります。」

カットマン

「そして、強すぎる力を完璧にコントロールできる姿があると言われている。」

あきら

「っていつか、なんであんたが参加してるのよ。」

みのる

「ああ、さっきカンペを渡されました。」

カットマンは、この後から何やらドロドロした雰囲気になったので、一目散にこっそり去って行った。

第十話 機動六課のとある休日 中編

エリオとキャロからの連絡をもらったタイキ達は、その足で件の現場へと向かった。そこには、体中傷だらけの幼い少女が倒れていた。「この子が例の……」

タイキが屈んで少女の様子を見ていると、

「傷がひどいっキユ。」

クロスローダーからキュートモンが現れた、

「キズナオール……!」

そして自分の手を緑色に発光させ、触れた場所の傷をふさぎ始めた。「傷は治したけど、疲れがたまってるみたいっキユ。しばらくは起きないっキユ。」

キュートモンはこう言ったが、命に別状は無いと分かっただけ良かったと、その場にいた面々は思った。

その後、少し遅れてきたスバルとティアナ、機動六課隊舎に残り「インペリアルドラモンの爪の欠片」の調査に専念していたデジモン達も合流し、皆で地下へ突入し、少女が地下に置いてきてしまったレリックを探しに行くことにした。

少女は後からやってきた、なのは、フェイト、シャマルに預け、機動六課のフォワード四人と、クロスハートのデジモン達は地下へと赴いた。

「みんな、短い休みは堪能できた? 今からはお仕事モードで行くわよ……!」

ティアナの言葉を受け、一同は張り切って進んでいった。しかし場所が地下道、暗いため足元が危ない、

「チビカメモン、ブルーメラモン、デジクロス……!」

なのでタイキは、クロスローダーよりリロードしたデジモンをデジクロスさせた、

「コウランブ、チビカメモン……!」

クロスローダーの光が収まると、頭のヘルメットと背中の中甲羅が光るようになったチビカメモンが現れた。

そのままチビカメモンを先頭に進んでいったとき、

「タイキ、向こうの角に誰かがいる。」

突然ワイズモンがクロスローダーの中から言った。

「え？」

「まさかお化け？」

皆が緊張状態に包まれる中、件の角から現れたのは、緑色の体をした頭のデカい妖怪、では無く、

「あ、タイキ殿。」

以前ホテル・アグスタの警備に言った時、召喚魔法を使う魔道士を探しに行ったモニタモン達だった。

「モニタモン、なんでお前達が？」

と、タイキが彼らに訊ねると、

「前に追うように言われた魔道士らしき人物がここに来ているんですな。」

と告げ、

「そしてこれが我々が追っている魔道士ですな。」

自分の頭部を構成しているモニターに、黒い服を着た長い紫色の髪の少女、の映像を映した。

「この子が……」

「んで、こいつの名前は分かるか？」

スバル達が少女の顔を覚えていた中で、シャウトモンが訊いた。

「遠目だったのでよく分かりませんが、同伴していた人物は皆、ルーテシア、と呼んでいたはずですよ。」

「ルーテシアか。」

タイキは彼女を見ながら思った、かつてデジタルワールドで共にバグラ軍と戦った「天野ネネ」の、自分と初めて会ったときの雰囲気と、彼女の雰囲気似ていると。

「それより、ここからは我々に付いてきてほしい。モニタモンの探

査能力はここでは重宝するだろう。」
ワイズモンにこう言われたモニタモン達は、タイキ達についていく事になった。

その後、再び地下を進んでいる時、
「何か来ますな!!」
突然モニタモンが言った。

そして、怪物が暴れているような騒がしい音を響かせながら、怪物と言うには無理がありすぎる美しい容姿の少女が現れた。

騒がしい音の正体は、彼女が壁を破壊しながら進んできた音である。

「あ、ギン姉!」

スバルが親しい相手に会ったように声をかけた。

「あの、こちらはどなたで?」

初対面のタイキはティアナに訊ねた。

「この人はギンガ・ナカジマ。スバルのお姉さんで、階級も年齢もちょうど二つ上なの。」

と、ティアナは答えた。

「それで、彼は?」

ギンガはスバルにタイキの事を訊いた。初対面なので当然である。

「俺は工藤タイキ。」

「俺はシャウトモン。」

「バリスタモン。」

「ドルルモンだ。」

「チビカメモン、カメ。」

「モニタモンですな。」

「ワイズモンだ。」

とりあえずその場にいる面子は全員簡単に挨拶した。

ギンガと合流した面々は、ひときわ広い場所へとやって来た。

「この辺りに大きいエネルギーの反応がありますな。」

辺りを見回したモニタモンは皆にこう告げた、

「となると、レリックはここに。」

ドルルモンがこう言った途端、

「カメー!!!」

チビカメモンが大きくふっ飛ばされ、そのまま気絶した。

「何かいるぞ!!!」

タイキはみなにこう叫び、チビカメモンをクロスローダーにしまい、ブルーメラモンを残してあたりを見回した。

「うわぁ!!!」

今度はエリオがふっ飛ばされた、

「どうやらタイキ、奴は素早く動き回ることに優れた奴のようだ。」
ワイズモンはこう分析した、

（動きが素早いと明るくても捕まえることは難しい、どうすれば）
タイキがこう考えている間にも、謎の襲撃者は次々と皆に襲い掛かっている。

「タイキ、このままじゃやられちゃうぜ!!!」

シャウトモンが叫んでいるのを見たタイキは、

「閃いた!!!」

一つ作戦を思いついた、

「シャウトモン、ドンドコモン、デジクロス!!」

タイキはクロスローダーを掲げて叫んだ。シャウトモンが光に包まれ、クロスローダーから飛び出た光と一つになると、太鼓のような姿をしたシャウトモンが現れた。

「ドンシャウトモン!!」

ドンシャウトモンは両手に持ったバチで自分の頭をリズムにのって叩き始めた。

「エリーゼのためにいゝゝゝ!!」

本人は”エリーゼのために”を演奏しているつもりなのだろうが、彼の演奏はリズムはあれど優雅さの欠片も無い騒がしいものである。そのうちに、タイキ達のいる空間に黒い影が現れ、しまいには停止し黒い昆虫のような生き物が現れた。

「あ、アイツは!!」

クロスローダーの中でディアナモンは声を上げた、

「この前骨董品盗んでいった奴!!」

ホテル・アグスタの警備のさいに、一度立ち会った事があるのだ。

「やっちゃって、ガリユー。」

するとガリユーと呼ばれた生き物の後ろから紫の髪の少女が現れた。彼女はモニタモンの録画した映像と同じ姿をしていた。

「君がルーテシアか？」

思わずタイキはこう訊いた。改めて見た彼女の雰囲気、天野ネネそっくりだった為、いわゆる「ほっとけない」が発動したのだ。

「だから？」

ルーテシアがこう言うと、

「なんで君はレリックを求めるんだ!？」

タイキは次の質問をした、

「関係ない。」

しかしルーテシアはタイキの話に耳を貸そうとしない。

そしてガリユーも、問答無用と言わんばかりに襲い掛かってきた。

それでも、先ほどのドンシャウトモンの演奏のショックが残っているのか、スピードは間違えなく鈍っている。

「姿さえ見ればこちらのもんだ。」

タイキはこう言ってクロスローダーを掲げると、

「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、ディアナモン、デジクロス！」

と叫んだ。

結果シャウトモン×4は一回り小柄になり、体つきも細くなり頭部は竜のような形に変わり、両足にはグッドナイトシスターズが装備され、スターソードはディアナモンの鎌を取り込んだ形状に変わった。

「シャウトモン×4 A！！」
アサシン

シャウトモン×4 Aはガリユーを見据えると、鎌のようになったスターソード「スターハーケン」を弓のように使ってガリユーに狙いを定めた。

「ちょ、相手はスピードが速い相手なのに、狙撃しようとしたらよけられる。」

ティアナはシャウトモン×4 Aにこう言ったが、当の本人は落ち着いている。ガリユーの爪がシャウトモン×4 Aを切り裂こうとした時、

「遅いうえにかかったな、罠に。」

と言うと、右手に持っている矢と思われる物を逆手に持ちガリユーを斬りつけた。ガリユー本人はうまく防いだが、衝撃で大きくふっ飛ばされた。

「これで終わりだ！！」

シャウトモン×4 Aは、ガリユーにとどめをさそうと飛び出した。しかし、スターハーケンがガリユーに触れる寸前で、突然発生した大きな炎にふっ飛ばされる事になった。

「ルール、大丈夫か！！」

続けざまに現れた少女がルーテシアに駆け寄った。大きさはリイン

フォース？と同じくらいだが髪は赤く、そもそも炎を操った時点でリインとは別物の融合機であることが分かった。

「アギト。」

ピンチにおいての援軍の到着にも、ルーテシアはほぼ無感情で反応した。

「ルール、レリックはいったん諦めて地上に戻ろう。この状態じゃちよつとやばいし、本局の魔道士もここに向かっている。」

アギトはルーテシアにこう告げて、その場から立ち去ろうとした。しかし、

「そうはいかん！出番が少ない分活躍させてもらおう！！」

ブルーメラモンが二人にめがけて青い炎の塊を投げつけた。

「な！？凍るだど？！」

「凍ってるのに、すごく熱い。」

二人はブルーメラモンの投げつけた「アイスボム」の影響で足元が凍り付いて動けなくなった。

「ナイスですブルーメラモンさん！！」

「あとはアタシらに任せな！！」

そして上層部から、リインとヴィータが猛スピードで飛んできた。

リインは自身の能力で絶対零度の冷気が発生させ、ルーテシア、アギトの両名を氷漬けにした。

「よし、これで。」

ヴィータが近づいて確認すると、氷の中は何故かもぬけの空だった。その上、氷の一部に隙間のような部分が出来ている。

「逃げやがったか？！」

「おかしいですね？ブルーメラモンさんの氷の拘束は完璧だったはず？」

床にあいている穴を覗き込みながら二人が言っていると、

「ああ、しまった！！」

突然ブルーメラモンが声を上げた、それは、

「俺の氷は熱に強いが冷気に弱い事を忘れてた！！」

ブルーメラモンの体が青いのは元々、適度な酸素を含んだ健康的な炎により体温が普通より高いからなのだ。そのため炎の動きが安定しているのとブルーメラモンの能力が相まって一時的に凍ったようになったのだが、リインの本場の冷気で炎が鎮火してしまい、それで出来たスペースを使ってルーテシアとアギトは逃げたのだ。

「面目ないですう。」

リインは、いかにもがっくりきたと言うポーズを取っている。すると突然、タイキ達のいるスペースが大きく揺れ始めた。

「どうやら地上で人工的に振動を発生させ、ここを潰してしまおうとしているようだ。」

クロスローダーより感じる振動から、何かが地上で何かをしていると判断したワイズモンは皆に向けてこう言った。

「レリック見つけましたー！！」

ちようどのタイミングで、レリックを探しに行っていたスバルとエリオ、キャロも戻ってきた。因みに、灯りはジジモンの杖にフリードが火をつける事でなんとかしました。

「よし、スバル、ギンガ、上に向かってウイングロードを。」

ヴィータはギンガとスバルにこう言った。丁度自分たちがここまで来るのに使用したルートは、若干斜めになっているとはいえ、ほぼ地面と垂直に近いので最短ルートで地上に出られると思ったからだ。だが、ここでタイキが、

「いや、もしかすると地上に出たところで不意打ちに遭う可能性がある。俺に任せてくれ。」

と、言つてクロスローダーを掲げると。

「今から出すデジモンにみんなで掴まってくれ。」

と、この場にいる皆に告げ、声の限り叫んだ、

「リロードー！！」

第十話 機動六課のとある休日 中編（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー。」

カットマン

「今回のテーマはドンドコモン。ドンドコモンは太鼓の形をした楽器型デジモン。得意技は聞いた者のテンションを上げる「ドンドコ音頭」演奏を邪魔するものを衝撃波で成敗する「乱れ打ちラッシュ」だ。」

モニタモンA

「ドンドコモンの太鼓の音は、聞いた者のテンションを上げる効果がありますから、競技会では盛り上がりますが、間違って喧嘩の場にも現れたら收拾がつかなくなりますな。」

モニタモンB

「頭を叩くわけだけど痛くないのかな。」

カットマン

「そういえば、前回お前らどこにいたんだ？」

モニタモンC

「ルーテシアを追い回してましたな。」

カットマン

「そうなんだ。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

戦いの部隊は地上に移行。新しいデジモンの絆のパワーアップと、メデューサモンのブルーフレア時代の幻のデジクロスが登場する。

次回「機動六課のとある休日、後篇」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5138w/>

デジモンクロスウォーズ 絆の将と魔道の戦士

2011年11月30日20時59分発行